



自分だけの 新神話(10)



第十章 統理(とり)の章

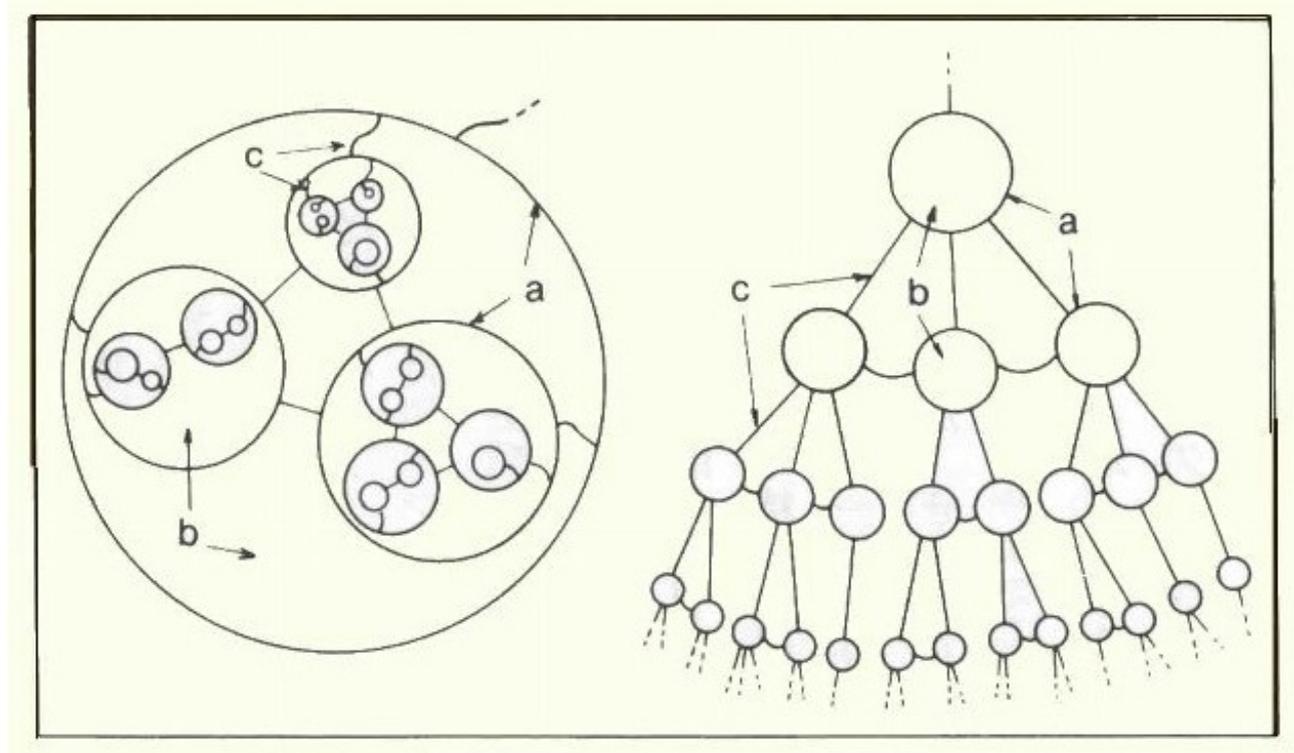
yae-mon

空なるところにひとつの玉のような意識があった。

周りには何もない無限の広がりのみであった。我々が考える時間とか空間といったものはない。

固有名詞をつけ時系列に話さねば理解できない世の人のために述べるなら、ひとつの意識の名は「梵」。彼の夢の開始点がどのあたりであったか定かではないが、ひとりあることに寂しさを覚え、自らを別けて双身とした。双身はしばし互いに愛で合った後、それでも不足を感じて、次々と別け身を創り出すことを繰り返す、その数は無数に増えた。その全体の姿は、最初の双身（父母）を頂点として繁茂する逆さ樹木のような姿であった。それを「梵の全系」という。「梵」の冠の林とつくりの凡には、おしなべて林のように見えるという意味がある。また、神棚に供える榊（さかき）とは、「逆さ木」の意味であり、常緑樹であることによって永遠性を表現している。

あるいは逆ツリーの姿ゆえ、下位を「根」という表現を以てする。いずれも玉（意識）の連鎖によって成る情報系を意味しているのである。 **(理論は下の図をクリックされたい)**



ところが、個々の玉(意識)は全能であった。それぞれに宇宙を造形する能力を持ち、それぞれが引き籠もれる宇宙を持ち、遊んでいた。だが、他の音信を聞き、しだいに近接した者同士で相互

交流するようになり、アイデアを元にした組織を作るようになった。組織で共通の宇宙を創り出し、

面白さを工夫するようになった。そのようにして生じた宇宙には、失敗作も多々あったが、独創性の発揮を芸術とばかり、さらに工夫するようになる。

その能力は、魔法の力というべきもので、夢を作る能力といってよい自在のものであった。

というのも、原理的に魔法で作られるものは、すべてオリジナル言語で書かれたプログラムであったからで、そこに意識の個々が参照光を当てることにより、観測されるものとなったから

である。その原則は変わらない。だが、みんな魔法の能力を柔軟自在に駆使して、そのような基本を忘れたように行動した。

そのようにしてできた宇宙の一つに、この宇宙があった。最初に理念と目的をはっきりさせた設計がなされ、それに従って宇宙は生まれたのである。

祖形の宇宙に入った意識たちは、創意工夫する科学者のようだった。梵天、弁天、ウーラノス、クロノスといった科学者が宇宙の基礎を作り、参加希望者に来場を促した。その人柄によって

興味した者たちが続々訪れた。その協力のおかげで、祖形宇宙はしだいに諸原理を明確化させ、細かいところまでが定まっていった。

ひとつの宇宙の雛形を与えた後、梵天と弁天は、志をクロノスに託して隠れ、その後クロノスは生命宇宙の基を作るまでにした。そこには幾多の意識が訪れて楽しむようになったため、一過性の風のような見聞では物足りなかりと、意識の長期滞在のための視座(思惟の座)として生命を創り出し、意識は生命体の個々に宿ることのできるものとなった。

生命体には、宇宙の諸元を使ったあらゆる形態が考案された。諸原理の整備に伴って、たとえば真空生命体、プラズマ生命体、物質生命体、原子レベル生命体などへと展開した。

創造精神豊かな純粋な魂ばかりが集まって、クロノスの土台をキャンバスにして、創意工夫を出し合って、それはそれは善意と愛と情熱に満ちた見事な世界が生まれたのだった。

細かいところまで意識の目は入り、そのことによって、些細なことでは壊れたりしないものとなった。

プログラムで言うなら、みんなの取り組みの熱意によってバグの極めて少ないものとなったのだ。

ところが、宇宙が安定的に運営されて長く経ったころ、この宇宙を自分たちのいいようにしたいという変則な意識がたくさん入ってきた。彼らは作りあがった見事な土台を改変しようとする者であった。というのも、この宇宙に当初設定した「エバーグリーンの理念」が、しだいに「生成衰滅」

性を持たされていったからである。美しい永遠の常緑樹にあちこち茶色の病変が生じだしたので

クロノスはそこに流入する意識の側の変節を感じたが、それもいつきのものと思い警戒すること

はなかった。それだけ、みんな善良だったのである。

PCで言い換えるなら、セキュリティレベルが低かったと言ってもよい。Win95の出だしの時代には

パソコンを楽しむだけの人で満ちていた。ところが、そこに邪意悪意が混入するようになった

のも、

ユーザーの中に邪悪を以て引っ掻き回そうとするヤカラがいたからである。

彼らは自らを人仙グループと名乗り、高度思考能力を持つ生命体の開発実験のためにやってきたと告げた。

理念の展開に沿った者の到来として、クロノスらは歓迎したが、彼らは以前の宇宙で、競争と闘争ゲームに熟練した者たちであった。このため、クロノスたち古参の科学者の意向を汲まないトラブルを頻繁に起こすようになった。

せっかく作った芸術作品を、人仙がやってきて謀略で壊してしまう。初めは小さな子供同士のつかみ合いの喧嘩のようなことだったものが、ついに古参者と新参者の間での戦争となる。仲裁にあたったクロノスははじめ、多くの参加者は意識を失わされ、その間に封神処理が施され、神界という収容所に入れられて、人仙たちの下働きをさせられることとなったのだ。

勝者は天仙として仙界に住み、下位の神界からは認識できなくして、神々の行動を監視した。

クロノスのときに、高度思考力を備えた原人たちが作られていて、多くの意識がそこにちょうど潜水服のように入って、地上の開拓作業をしていた。彼らは、封神処理の間、上位界で何が行われているか知らぬままに放置され、いつしか意識を退化させていったのである。天仙は、世界を仙界、神界、霊界、幽界、人界、地獄に別けた。上位から下位を制御できても、逆ができないようにしたのである。

クロノスは創造当時の記憶を呼び起こすたびに、梵天に訴えた。理念が過激に遂行されてしまったと。なにゆえかよくわからない。どうしたことなのでしょう、と。彼の記憶は多く消されていた。

梵天は、全体を知る者ゆえ、何が起きているか分析するためにも、もう少し様子を見ることにした。

クロノスには、再び廻り来る春もある。よほどのことがない以上、静観するのがよいのではないかと諭した。だが、それからクロノスの消息が途絶え、人仙から拷問を受けていることを知り

、その「よほどのこと」に関して調査が入ることになった。介入が必要であると判断されたのである。

火の鳥は古来より、これが現れる時代は世が根底から覆る時であると思われていた。すべての地上の文明がその寿命を終える時、必ず地上を火災が覆い尽くした。その原因を火の鳥に求めたのである。

その時代には、世の矛盾に疲れた人達の願望が嵩じ、正義によるのかそれともその他の動機で起動されるか分からぬ、謎に満ちたシステムチックな摂理に人気が集まった。

なぜならそれは、迷路に迷い行き詰まってどうにも動きの取れぬ状況の、最終的な打開、最終解放をもたらす手段と認識されたからであった。

宇宙。それは有情すなわち魂と普通言われる永遠の存続が謳われた意識ある主体が、自らの生きている証しとして様々な体験時空の中に意識の目を置いて、自分と被造物の関係を認識するために作られた仮想時空である。

それは多くの意志によって作られたとも、単一の意志によってつくられたとも諸説あるが、元はといえば意識の主体が楽しむべく設計されたテーマパークであった。

その中で、火の鳥の初元的意義はこうである。

この宇宙ができあがるとき、これを設計した太古の神（と言っていいであろう）は、宇宙の土台に存在を維持するための基盤となるエネルギーを封入した。それは宇宙の膨張と共に普遍し、科学的に言われる黒体輻射となった。それはいつも宇宙に体温があって生きていることを証して、その暖かさは愛と目されていた。

だが、設計者はこの中に更なる愛を込めていた。それは、精緻に作られたものであればあるほど、それにのめりこみ固執を招く可能性を持っているゆえに、その傾向を戒め、有情に本来備わった相を取り戻させるための摂理として用意された。それが、破壊と焼却を以てする火の鳥であった。つまり、緊急避難処理機構だったのである。

この世に生きる者は、本来備わった相など知る由もなく、また知る必要のない、むしろ知っては興味が削がれるところのものとされていた。たとえば、ネアンが宇宙船の中で「蚊」の一生を、そのものに成りきって体験した如くである。

だから、ともすれば、有情はテーマパークに遊ぶうち、自らの元の性質を忘れ、あるいは失い、その仮想的対象こそを事実、実態と誤認するようになる。

テーマパークの主催者は、細心の注意を払い、極端にならぬための政策を取ることになっていた。

封神の後、神界に登場した政府は、まだしも良識の府であった。当初の科学者の建設的の思考が自然ににじみ出て、輝ける魂の神々が支配的だった。

元々が善良な魂ばかりだったからである。

正義は誠実の表れとしていつもあった。人界の管理は、適切に施され温かみに満ちていた。ところが、人仙はそこに邪悪の種を発芽させる実験をする。

神界に仙界から功利主義や競争精神が持ち込まれ、誠実さ必ずしも得にならぬ例が続出してきた。暗い時代の到来を思わせるように、神界の空も灰色がかり、色あせていった。神界も人界もこれに伴い、邪悪が先行し始め、不安定化した。

だが、建て直す神が現れた。国常立神である。彼は、正義を揺るがす行為を戒め、神界のあり方を正した。こうして、神界人界とも元のよすがを取り戻したのだ。何度にもわたる再来であった。

しかし、天仙(人仙)の存在は、彼らの把握できるところにはなかった。封神処理がされていたからである。天仙は計画を中座させられ、面白みが削がれたのを見て、魂を持たない杖の眷属を国常立神の討伐に向かわせた。これはいわゆるゾンビであり、噂に聞く梵天の意識の目が宿らないことが見込まれていた。仙界から密かに下ろされ、天仙とは無関係に装いつつ、邪悪な精神性を神界にふりまくのである。

国常立神の正義に基づく厳格な執政を恐れる者たちの間に不安が嵩じていた中に、黒い陰謀が投入された。神界にクーデターが起こされたのである。ここでも、ゾンビを直接関わらせる計画で

はなかったが、心が軟弱な側近たちに暗殺は不可能だったため、ゾンビにやらせてしまったのだ。今度ばかりは、二度と再来できないように呪詛が施されたのだ。

ゾンビは、プログラムの観点からすれば、ウイルスのコードのようなものである。

あたかもセキュリティを破ってきた不明瞭な外部からの侵入者のように見えるのだ。

主催者が革命によって交代した後、人界の文明の進歩はどんどん加速させられた。

バラエティーに富んだソフトを編み出し、有情を虜にした実績によって批判的な外圧をかわすようになって、芸術性などは無視されていったのだ。その急ぎ仕事ぶりには、何かの目的が

あるかのようにだったが、まだ梵天の知るところではなかった。

そしてあろうことか、天仙主導の急加速度世界を、夢の楽園と銘打ち、梵の全系にある外野に向けて宣伝がかけられた。根っから純粋な意識たちの間では、非常に面白いテーマパークだとの評判が立った。

お子様連れでぜひいらっしゃい、とさえ宣伝された。

そこに入る者は、まず控え室で幾つかの説明を受けて書類にサインすることになる。

それは契約書というものであり、このテーマパーク内にある限り適用されるルールで構成されていた。

魂の記憶を消すこと。以前の名前を忘れることなど。

書類にはなにやらややこしい文も書いてある。

それに同意するなら、サインして無料で入室できるという具合だ。

純粋な魂たちは、初めて見る契約書なるもののことよりも、施設の誠実さを信じて、面白さを味わい

たくて来ているためサインする。

だが、入る人数と出てくる人数の差が歴然としていた。回転ゴンドラのように同数になることがない。

還らぬ魂たちを心配して梵天に訴える眷族が増えた。梵天が行って掛け合うが、主催者はみんなルールを守って楽しんでいる最中であると答え、さらに追求すれば、サイン入り文書を見せて、ほらこの通りと言い逃れ方をした。

テーマパークはやはりプログラムである。そこに有情は試し火の火を入れてプログラムを実行しながら観測する。己が意識を忘却の麻酔プログラムで麻痺させて、命の誕生から終わるまでの課程を楽しむのである。

彼の欲望のすべてを満たすには命は短く設定されており、また課程の中で新たな欲求を見出して、次の更なる経験を欲するように設計されていた。射幸心をたえず煽るようになっていた。

欲求が生まれれば、その需要に応じて、次の生のポジションから果たすべき課題までが功過得点によって計算し直され、周到なプログラムが用意される。参加者はみなプログラムである対象を、マリオのゲームの如く相手にしながら、そこに出てくる敵と戦い、味方と出会い、様々な試練を乗り越えて到達点に至ろうとするのであった。

それで未達のタイムオーバーなら、次の輪廻がシステムチックに用意される。

その間に、別の欲望や過失や故意などが新たな功過を生み、またも採点の対象とされていく。これらをことごとくクリアーするために、何百何千という輪廻転生を繰り返すのである。

その時間の中で、参加者はいつしか自らの出自を忘れ、有情というものになってしまう。

有情の数はあまりに多く、多くはシステムチックに処理されるが、特別に評議の場にかかり、恩情的措置やたしなめの懲罰措置を受けて、また戻される。

針の穴を通すほどの確率でしか抜け出すすべはない。こうしてテーマパークは、あたかも地上の楽園と銘打たれ外部宣伝がかけられたかの国の如しであった。が、その実態は強制収容施設であったのだ。

これはどうもおかしいと、隠密が放たれた。その中にネアンらのプロジェクトもあった。しかも、火の鳥使いが直々に乗り込んできたことは、テーマパークの廃絶をも視野に入れたプロジェクトであったことになる。

ところが、テーマパーク主催者である天仙は、永久的存続を願った。

自らの支配権の永続という幼稚な精神性が支配原理となったとき、悲劇が生まれるのは歴史が物語っている。

彼の傘下にあるすべての生き物の希望を、存続一色に染め上げることをまず行った。

教育、暗示という方法で、存続しないことの悲劇を強調し、非存続に向かうことに苦痛を与え、存続に向かうことに安堵感と称賛を際立たせて、飴と鞭の効果を活用した。

だがそれは、真の意味の魂からの希望ではなく、無知なレベルで為した希望でしかない。

魂の意識は、肉体の意識の配下に置かれて半睡、不満を嵩じさせないために、睡眠時の解放で疑似的に創造行為をさせて慰めるという方策をとった。

自己保存本能を盛んにして、破壊時における懲罰的痛みとワンセットにして、生きることを希求せざるを得なくした。その傾向を遺伝子にも組み込んでいき、このテーマパークへの執着心を魂の性向からして変えて刻み込んでしまおうというのである。

痛みの中でもがき必死で生きんとする様。それは傍目から見れば涙ぐましいものに写る。

だが、それは死への恐れと次の輪廻への欲求となるばかりである。

ところが、それでも支配者は宇宙の存続に満足が見出せないを知るや、さらに別の方法を編み出した。

すなわち、善と悪を戦わせてそこから生ずる残留思念を存続エネルギーにしようとしたのである。悪の力が上回っていればいるほど、善はその矛盾に対してすさまじいストレスエネルギーを発散するが、それが宇宙存続の原動力となるというのだ。

結果、そこに閉じ込められた有情たちは、思うように行かない、悪い差し障りがあるなどの不幸の客体となる。ときおり順調に行く晴れの時間をその中に織り交ぜれば、いつか不幸を脱して幸福になれると思い努力する。それが錯覚であっても、土台が存続しなければ何事も実現しないと錯覚しているから、またも輪廻してまでも存続を希望するのである。

「ここでもっと生きたい。経験したい。輪廻転生したい」といった有情の希望は、ただちに外野に

伝えられる。ほうら、こんなに楽しんでおられるじゃありませんか、と。

この方法がいつまで効果があるかわからないが、宇宙に幾つかのポイントを設けて、そこで善悪のせめぎ合いをさせるだけでたいそうな効果があることも分かったとみえる。

そのようなポイントの一つが地球という惑星であった。

地球には、かつて反逆者とか戦犯と呼ばれた者たちが多く下ろされた。彼らは何が真実であるか心底知っていたため、戦勝者に対して表向き帰順の意を表明しても、心中迎合しない者が多くいた。

そこで完全な敗北観念を抱くように、洗脳教化する強制収容所として作ったのである。

彼らはもとより正義と秩序を重んじる者たちであったから、正義の元が心地よいので集まろうとする純粋さを備えていた。ところがそこに、ならず者やごろつきや刺客を高見から見下ろして送り込むのである。同じ外形をした仲間としてくるものだから、そうとはわからずトラブルになる。まとまろうとする正義の一团はまとまれず、内部崩壊してしまう。あるいは外部からならず者の兵隊が来て潰してしまう。こうして、正義はいつまでも成り立たず、心ある者たちの心の中に理想として秘められるに止まったのである。それがまたも錯覚させて、土台の存続を希求させることになった。

戦勝者の干渉は、地球に下ろすものたちの形態にも及んだ。

地球は50億年の年月の上に生命が進化し、人間を頂点とする生態系が築かれ、宇宙船地球号の中で生命輪廻のサイクルが営まれている。だが、そこに生息する動植物の多くに、実験の痕跡が残されている。いわゆる遺伝子工学の、である。

今の人類もそのご多分にもれない。地球に当初存在した人類は、類人猿的であったが、人類として登場した者は、準・神人であった。これを原人という。

この原型から、何かを足しても引いても、支障があるほどに完璧であった。観測できる視野のレンジは広く、形而上の実体をも見通すことができた。子供は、父母の頭頂から気の塊として生まれ、長ずるに従い物理的な形を整えていくのである。幽体と言われる形で生まれ、肉体をしだいに纏うという生長を遂げたのだ。生命の木の図章は、もとは幽体の象徴化された解剖図なのである。

その原型は、敗戦者の技術によってこの上なく創られていたため、戦勝者はこの秘密を解き明かそうとして、いくつもの不具を創ってしまった。どうしても武力以外の分野で力が及ばないと知った戦勝者たちは、地球上の原型人類を収監して、そこからできた不具と動物をあいのこにした生き物を、人間として下ろすことにした。

具体的には、宇宙人が人間の遺伝子改造を行った形だが、未だに幽体との整合が図れないでいるために、満足な寿命が保てずにいる。

戦勝者は、技術的に劣勢なのを逆恨みし、原人をあらゆる皮肉を込めて改造した。

その端的な例が、子供が汚物排泄口のあわさいから生まれるようにしたことである。

かつての原動物はいっさいの子供を子孫を大事に生み育てる理念の下、頭頂から生み出していた。それを汚物の次元にまで貶めたのはひとえに戦勝者の企みである。それは、人々や動物を支配する彼らの方針を表していた。

シュメールやギリシャの神話などは、人間は神に嫌われた存在であったとしている。

インド哲学も、この世の輪廻から解放されることのみを希求し、そのための実践哲学の体系を創っていった。

若干、タイムを取ろう。ただいま正神の中から、この筆者ネアンに対して、人界の存在意義を肯定する意見がもたらされたので、書き記したい。

人界は広大無辺な宇宙全体のうちにある、ひとつの次元時空であり、有情の意識が好みに応じて居心地の良い次元時空に本拠を置くと、宇宙の全体像を把握させたり、自己中心に陥りがちになる意識たちに他のステージを理解させるといった理由から、他の意識に対して働きかける（相互作用する）機会を作るべく設けられている、という。

よって人界には、天人阿修羅地獄餓鬼畜生に大別される次元時空から、様々な性格の者が共通の交流の場を求めてやってきている。それはさながら、ディスコに集う若者の群れといった感じであり、慎ましく高貴な魂から、粗暴乱雑な魂、あるいはアウトローな者までが混在し、それぞれ他の者から、あるいは成行から、自己を改変する手懸りを得ていくという。

人として生まれた者は、ちょうど老人ギブスをはめて活動する如く、元あった力を減殺し、造形困難なマテリアルを使って、共同の建設的作業などを通して、自らのありかたや考え方をグローバルなものに改変させていくというのである。それを魂の進化と言っているらしい。

その下地に、有情はすべて、機会、可能性、与えられた時間において平等であることが謳われているという。

また、大から小に至るまでの局面でストーリーがあるが、文明の進歩や支配的思想の変遷は、相互作用の仕組みと角度を少しずつ変化することにより、進歩の形態を多様にしているという。

だが、ネアンはそれを聞きざま、欺瞞であると断言する。

その理由として、そこまで配慮されたシステムならば、なぜ古来から宗教者が頻繁に出て精神論を説かねばならなかったのか。釈迦などは、衆生に心のレベルにおける解脱を説いている。それは、いかに耐え難い環境が衆生に対して与えられてきたかの理由ではないか。むしろ釈迦やその他の聖者の出現により、衆生は救済されて、今の時代に子孫を残せるに至ったと解釈もできる。だが、どう考えても、闘争の歴史は多くの無駄な繰り返しを招くものでしかなかった。価値感を狂わされた競争の歴史は、直ちに壊れる砂山の建設に似て、共同の建設作業らしく見えても、最終的には希望を与えるものにはなっていない。多く預言されたよう、この歴史が滅亡を必然としているように見受けられる。それはなぜなのか。むしろ、何か別の理由、もしくは怠慢があるのではないか。

その理由としては、邪な計画が（権利伸長のための宇宙存続計画の一環で、善悪の闘争が優先されている）潜在しているからではないのか。ソロモンはこう言った。「天の下には、真新しいものはひとつもない」と。文明は同じマテリアルを抱えて、ただ輪廻しているだけだからだ。そこで魂はやがて進歩し悟る？そうではなからう。マリオのゲームもクリアのハードルが次第に高くなっているのと同じ原理なのではないのか。

もし支配神に邪な心無く人界を運営する気があれば、迷霊を迷霊のままに放置したりはしない。それは明らかな怠慢。過失というより、故意に起こされたことと判断できるのである。迷霊がどうしてもそうしたがるのだという言い訳は、機会や与時間の平等という言い訳の上に胡坐をかく怠慢の証でしかない。しっかりと逐一の例を検査し、ケアーを図ってこそ前提的な大義名分も立つのではないのか。

ちょうど神界の人界支配の構図は、どこぞかの政府の官僚組織に似て、権力保身の邪悪さだけが支配し、肝心の行政はおざなりになっているとしか言いようがない。そのようなところから与えられる末端庶民の幸せや所期の進歩などといったものは、実現を目的にしないお題目にすぎないと断ずるのである。

これに対してネアンは、極度な邪悪さを排除したマトリックスを、善良な注意深い管理の下、博物施設として運営し、希望者にしっかりとしたガイドをつけて閲覧してもらうという新型システムへの移行を、こちらサイドで提案している。今目下、梵天の宇宙プランの中のひとつとして実現が図られようとしているのだ。

このために、従前のシステムを全廃することも、先天的な邪悪、あるいは洗脳の解けない後天的邪悪のすべてを肅清することもやむなしとする。神界政府の人事の総入れ替え、そして罪根の洗い出し、関わった者の処罰を行わねばならないとする。

だから、異議があるという正神は、邪神側に加わって戦われることを薦めるのである。とにかく、神界全土に渡っての関が原の合戦となることは必定。どちらにつくかは、早々に決められよ、というわけである。

さて、割り込みが入っていたので、話を元に戻して、邪神一味の仕組んだことをもう少し論じよう。

今から四万年前の現人類発祥の時代には、人間を動物よりも機能不足に作りかえる目論みが実行された。危険の接近などを、エネルギーの場として捉える観測能力を、学習的に奪い去ったのである。結果として形而上エネルギーを感得する能力が殺がれている。一般動物との会話能力も、

心霊や気のエネルギーに対する盲目は、未来に対する盲目でもある。こうして支配の神々に盾つけないようにしていったのである。

たとえばUFOは様々な形態で飛んでいる。ところが人の目は都合のいい盲目で、見たくもないものは見ない、見たことにしない、そういうフィルターがかかる仕組みが備わっている。

人間の側で不可知なものを拒絶する仕組みを進化のうちに作り上げたとすれば進化論的だ。だが、進化した科学者である神々（いわゆる宇宙人）が関与しているのだから、人に見せない、存在を悟らせない仕組みを遺伝子に組み込んだというのが本当である。

なぜ古来より目に見えない神が実在のものとされてきたか。それは霊感的に人を指導したというより、人を選んで姿を見せてきたからである。聖書の預言者等は神を見せられた者だった。大衆を精神的に支配するシャーマンに姿を見せ、知りえない未来の預言を述べさせたとなれば、大衆への波及効果は絶大である。

人知の未熟な黎明期であれば大思想の根底を作ってしまうことはいとやすいものとなる。悪しき神々、地球を支配するインベーターは最初から地球の歴史をコントロールするために人の遺伝子に小細工をしたのである。

己が存在を見せないために、脳の仕組みを動物一般のそれとは乖離させ、自然界で観測される情報のレンジを絞りもしている。スマトラ沖地震のとき津波の到来を何らかの危機情報として察知した像や蛇などの取った行動と、危機に向かって飛び込んでいった人間との種族的乖離は大きいと言わねばならない。

聖書に言われる楽園追放とバベルの事件は、いずれも神の観測領域からの段階的脱落を意味するものであり、それは遺伝子操作でなされたことだったのである。

アンバランスな脳が今だ。では聖書にも偲ばれるような、集大成された優秀な原人脳のモデルはどこかにあるのか。それは、ある。

外傷や奇形などの原因で発症するサバン脳は、コンピューターを凌ぐ記憶力や演算能力を発揮するケースがあるが、阻害要因がたまたま取り去られた結果なのである。

しかし、その能力をあえて取り去った神を名乗るものがいたことが史料で伝えられているわけだ。童話や思いつきではない世界の誰もが目にする史料として、堂々たる定番となっている。だが、不可解な神のしたことに対して、崇敬しても、疑いを持つ者はいない。

そのようにも小細工されているのだ。

はっきり断言しよう。

圧倒的に優位な力を持った神が、自らが創造した物ゆえに、生殺与奪は我が権利と、生き物が悩もうが苦しもうがしたい放題する。そして、我は主人なり、崇めよというのが、この傲慢な神を語る悪魔である。彼は未開の人類に恐怖を与えることと、ルールを教え込むことによって、姿は現さずとも存在のアピールを十二分にしているのだ。

そして、ときおり神懸りして、猟奇的凶悪犯罪を犯させる。犯罪者は、神が指図したと訴えるが、見えないために採り上げられることはない。

ちょうど、飼育箱の中に低次元発展途上の生き物をたくさん入れて実験する科学者のようなものだ。生き物が未熟だが思考能力を持つことに興味していろいろと試行しているようなものである。

彼はこの生き物に自分以上のものを与えたくない。だから、様々な能力を取り去り、滅びを必然のものとしたシナリオを文明というタームに対して与えて、その中で実験を繰り返しているのである。

こんな話はすでにされてきたことであるし、だれでもうすうす推測がつくことである。だが、ネアンはそれをいくつもの困難を押して確かめようと思った。

彼は、2005.7.に地球に変装して潜入しているとおぼしき宇宙人にそれとなく矢継ぎ早にいくつかの質問を試みた。分かったことは、彼は今仕事がなくここに遊びにきているとのこと。

私は、宇宙人の監視を受けているような気がよくするが、あなたもそのひとりなのかの問いに、分からないとの返答。エホバとは宇宙人なんだろうの問いに、言葉に窮しながら分からないと返答。そこですかさず、第三次世界大戦はいつになるかと問うと、まだ決まってないと答えたので、ネアンはやはりそうか（計画はある）と得心した。

科学者である宇宙人は、歴史のシナリオをその通り誘導するために人間側に代理人を組織して工作活動をさせている。その忠実な宇宙人のしもべたちは、人類の利益を度外視した次元の考えで働く。むろん、よく言われているフレーズは、この数行に関して神を宇宙人に置き換えた言葉だ。だが、それを宇宙人と看做せば、どんなにふざけたことかが分かるだろう。**(インベーター、宇宙人、邪神、その中に未来人が神人として加わるのが第十二章あたりから出てくる。真に善良な宇宙人は、地球の未来人の組み込まれた神界組織の唱える地球自治の名目によって、やってこれなくされているのが実情なのだ)**

要は地球生態系は、宇宙人の手の中にあるということ。天にあるごとくが地にあり、地にあるごとくが天にもあるという諺は真実なのである。地に満ちた不合理は天に起因している。天国云々は意識が地的係留から離れたときのことであり、地上に天国は築けない所以である。意識は魂として地上付近に止まり、次の転生に備えるという。だが、臨

むその場は、広漠として、不合理と不正に満ちている。正そうと臨んでも多大な摩擦を受けて頓挫するのが落ち。逆に不正な者は世の支配者となりやすく、民を酷するためにめらいがない。そのように宇宙人の意向を受けて天が配材するからだ。それでいいのだろうか？そのようなところに、一体誰が希望してやって（転生して）くるというのだろうか。強制的な摂理で縛るゆえに、否応なく来ざるを得ないのだ。

いくら人類だけで英知を結集しがんばっても、干渉者がいるゆえに実らない。宇宙人がいくらも来ていると証拠をそろえて提出したとて、代理人が異議を唱えてもみ消してしまふ。しかも、どうしても人々に見せるのは、邪悪な宇宙人情報だけ。

強制収容所には、期待をもたせるような思想を表に出さないようにするエージェントがたくさん入り込んでいるのだ。神はいつまでもないか、あるなら漠たる理想論の中で盲信されるのみだ。そして、人々は矛盾を抱えたままで死に、次のサイクルに望むことになる。

これでは、ああ、と嘆息するしかないではないか。

正されるべきは、科学者の宇宙人による管理であり、やるべきはそれを根底から解くことにある。

といっても、北朝鮮を見れば分かるよう、強制収容所から逃れるのが至難の技であることからすれば、地上人類に一揆を求めるわけにはいかない。神々のレベルでは神々に、宇宙人のレベルでは宇宙人に頼まねばなるまい。実際それは動き始めていなくてはならず、そうでなくては何の神か、何の宇宙文明か、義や正義のへったくれもないことになるのだ。

さて、それを測るすべであるが、地の如くが天にもあるとすれば、地の獄たとえば北の解放が、天の解放の兆候となるのだろうか。

だが、天は自らの改革がなされることを嫌い地の改革すら妨げようとしている。

だからネアンは、彼らの対立軸に正神を据えて、古来からの復活神話を土台にした新神話を作る。神話が認められたものとなれば、旧神話を塗り替えて機能することになる。すなわち、邪神の掃討と正神の復活復権がワンセットになった行程が実行される。その中で、火の鳥という最強兵器による脅しと本格使用によって行程を円滑ならしめるのだ。むろん、ネアンはすべて焼尽することを少しも厭わない。

神界にまで邪悪はびこる世なればこそ、ターミネーターとしての火の鳥はその本質を十二分に顕わさねばならないのである。

神話には呪力がある。神話創造性といえる呪力が古代からシャーマンによって知られていた。

彼らは発展的に神々を生産し、神々の属性と役割を作り、神々の物語を作って、その広域的な効果を投射的にこの地上に持ち越そうとしたのである。

そもそも、自然界に遍満する謎の存在を見出し、彼らに自分たちへの守護や啓発を頼んだのが最初であった。その頼りがいある存在を称して神と呼んだのである。

以後、人間の営みは高度化し、為政者があらわれ、為政の現場も複雑化したため、守護の内容も現世利益的な様相となり、複雑化せざるを得なくなった。そして、いつしか神々をも使役する方法はないかと工夫をはじめるのである。実際、この地上に実現したいことは、神々の認可と守護を得て行うことが望ましいし、その守護下にあるとき、事は円滑に進むのである。

とするなら、この手続きを人間が主体になって行えるに越したことはない。神々はもともと自然霊というべき、無尽蔵無定形な力を持つ者であったが、それに一定の利益を呼び込むための志向性を与えることを思いついたのである。

こうして、神々はシャーマンの手によって製造され、属性が付与され、この神は何が得意でどんな力を授けてくれるかが規定され、それを周知の元に確定的にするために神話が作られた。

いっぽう自然界の存在もまた、人間の発する意思に反応して、自らの役割を受け入れたのである。こうして神話にストーリーを持たせるとき、神々はその通りに振舞うようになった。いっぽうで人々を利益し守護する神であるとともに、もういっぽうで歴史を規定するものとしての両義性を持ったときであった。

その効果を見て、社会現象さえもその呪力により誘導しようと図る者が現れた。

そして、最も狡猾な者が世界支配を目論むため、歴史の始まりから終わりまでを規定するものとして編纂させたのが神のシナリオ、神話であった。

強力な呪力を持たせるために、神々をも魅了するストーリーが描かれた。神々も知らぬ宇宙創生の時点からの歴史を綴れば、権威も十分となる。下位の何も知らぬ自然霊たちも、自らの立場を知らされて、この演劇の深みを見て鼓舞されることとなる。あるときは功大きく、あるときは下位に服属させられて、上下の隔たりを諦観するものとなった。神話による、天界の秩序はこうして生まれた。それは一種の催眠術のようなものと言える。

純粋なエネルギー的存在であったものが、形象と属性を持つようになり、神となったのだ。

以上は人間界から見た神話の創造性の物語である。だが、地は天と連動している。作用あれば反作用。因あれば果。こうした緩慢な人間界の物語も、天界における最大戦

争たる天地仙人禽仙の戦いと封神を描いた封神演義の裏返しに他ならなかったのである。

そもそもの最初は、出来上がった大宇宙を創造神の手から奪い、未だかつてなかったほどの面白おかしいテーマパークの構築と、予期された大宇宙の終焉を延々と回避し続ける科学的手法の開発を果たし、永遠の支配体制を確立しようという、科学者たちの邪な目論見から始まった。

反対する者は圧倒的に多かったのであるが、反対派を圧殺する陰謀が企まれた結果、戦いがあり、創造神と古参の神々が抹殺され、魂が封印され、記憶が消され、演劇のロボットと化す神話で縛られるに至ったというわけである。

神でそのようななら、人にとってはなおのこと、観測の機能を限定された上で、プログラムに直面させられれば、そこにある自分こそが真実と思い込むこととなる。

彼がそのプログラムを終えたとしても、直ちに次のプログラムに直面させられるとすれば、彼はいつまでも真実に触れることができない。人も封神の多重夢に置かれたに等しい存在なのである。

これを元に回復するには、催眠で何重もの夢の中に封じ込められたのとは逆の解除催眠が必要となる道理である。

一つ一つの夢の階層の縛りを解いていくのに、その迷宮脱出の鍵を探して夢の輪廻を何千何万と繰り返すマリオのゲームのようであるとき、いったい人はいつになったら解放されるのだろうか、というわけだ。

だが、それは邪な者たちの支配体制の存続を図る目的で、半ば暴力的に置かれている。そのようなシステムは、別の意志によって打破されねばならない。

(2014年1月になって、これは最も創造神の初源を表すと目される資料が、ネアンが批判眼で接していたホツマツタエを解説するサイトで見つかった。<http://gejirin.com/amenarumiti.html> 真実味において、おそらくこの情報にかなうものは他にないだろう。ネアンの子供の頃にしていたままごとの世界さながらだからである。しかし、この記事によってネアンは、この創造神の動機がすべての諸問題の原因になっていると知った。もしこれが真実なら、この創造神は間違いを冒している。その間違いを指摘するなら、それは拡大をどこまでも求めようとする心にある。何を先を急ぐのかとよく問われるのと同様に、何を拡大にこだわっているのかということなのだ。

人も生き物も、胸に息を吸い続けて広げる一方では無理があるように、拡大が止まれば今度は、息を吐いて縮退させることが大事になる。それを呼吸という。円満に生きていくためには、この呼吸のサイクルがたいせつなのだ。その結果、身体は円満に造成されて、大人の身体となり、息を吸った時の肺活量も劇的に増えるのである。子供の身体に鞭打って、息を吸い続けると強制しているのはいったい誰なのだ。なぜそんなに急がねばならないのだ。無理をさせてまで。つまり、このチャネリングの主たる創造神という者は、邪神の意向を反映した偽物ということなのだ。2014年からの記載となる第十四章で、このことに触れることになるが、この世はどこまでも邪神の影響に毒されていると言うしかない。しかし、初源の状態を言い表したすばらしい説明に

はなっている。どこからか、邪神の言い分に置き換わっているだけだ。参考にはなるが、いつしか邪神側礼賛に取って代わらせてしまう間違いも含まれているので読者は注意だ)

いっぽう、別の意志によって編纂される新神話は、逆手順もしくは荒手順を踏むものである。

神々を縛り付けている神話を別の神話に置き換えて、神々の目覚めを誘起し、その目覚めをあらゆる有情に押し広げて、元の原因から除去しようという方法なのだ。

ネアンは創造神梵天の支持を受けてこの事業の遂行者となった。

これを「神もののけぞ知り人知らず問わず語りの裏神業」という。

力ある神話は、まず規定しようとする世界の初発を書き記すことから創めることが肝要である。

その体裁は、宇宙の始まりから、しだいに本題とするシャーマンの住む時代に至るまでの時間展開を描くものでなくてはならない。世界各地にある神話のどれをとってもほぼそうになっているのは、事情通の手になっているからである。思いつきのように後から歴史時間を遡るような筋書きであってはならないのはむろんだが、よほど神々を引き付けるものがあるなら別である。なるべく神話時間はトップダウン形式を守り、同時代におけるもの、あるいは下界の時間におけるものは、小説風であろうがなかろうが任意とする。

人というものは、後に奥付を与えられることを喜ぶ性質があり、推理小説のような体裁を好むものであるが、神々は神話に権威を認めて初めて感動して読もうとしてくれる。祝詞においても、言始めは権威付けられているであろう。

ことさら宇宙の初発には、神々は自らの出自を知ろうと注意を向ける。それが啓発的であればあるほど、神々は賛辞を送り、それに倣おうとしてくれる。（釈迦が神々を仏教護持に振り向けたのは、ひとえにこの効果である）

神々はかつて純粋な精霊であったものが多数を占める。ただ世界を愛で観測することで生活としていた。その彼らに、役柄を与えて目的のある舞台に立ってもらう物語、シナリオとなるものが神話なのである。ゆえに、彼らの魂を啓発鼓舞するものであればあるほどよい。（釈迦は神界や下界の各地で説法し、各階層に応じ有情に悟りを開かせた。神界における説法には、やはり宇宙の開始や神々の出自に言及するものが採り入れられている。悟りに至れる知識程度に応じて説法が為されたのだ）

古事記に限られた神々の名を挙げても、残る神々を八百万神としたように、残された精霊たちに対してもエキストラとなる神々としての配慮が要る。こうして、天地に隠された有情のことごとくを参画させる物語たるを以て、力ある神話となるのである。

創られた力ある神話は、宇宙を規定する設計書に準ぜられる。というのも、下界の上に位置する神界は、神話の筋書きによって動いているからである。神話が古代都市風の神々の社会を描くならそのよう。テクノポリス風ならそのようにまたたく間になる。

下界に対する神界の作用効果を書くことによって、下界はそれに規定されるという手順を踏む。よって、神話を下界から制して、神界から下界を制するという手順を踏ませることが可能となる。

かくて古代の為政者は、神話に自らの出自を有力な神の末裔と位置づけることに精魂傾けた。古事記に見るように、シナリオ上最も優位な神々に自らの先祖を振り当てて、その神の力ある加護を我がものとしたのである。

神話は、古今任意の誰彼によって、多く思いつきのように書かれたが、神界の要請もあってそうになっている。こうしているうちにも神話はあちこちに出現し、神界はあたかも下界

が電波の海のように、ノイズの海となっている。

その中でも、より強い神話が主流、神々の主舞台で上演される。日本神界の主流はやはり古事記である。

神界の田舎にも、舞台があって、任意の神話が演じられているが、そんな中では、風土記レベルから、今流行のファンタジーアニメの筋書きまで、舞台神話として採り上げられている。

観客の神々から発せられる啓発の波動が、下界をも揺るがすことになる。

下界の政治を動かせぬ小さな人々が、自らの理想を世界に向けて投射し得るのは、ひとえに神話効果によるのである。

ここに言う魔法とは、東洋魔法になるであろう。

魔法の作用の原動力になるのは、意志の力であり、意識の問題が根底にある。

というのも、「個々の意識は世界を組み立てつつ観測している」という根本原理があるからである。マトリックスを相手にしているという絶望的な印象より、相手は幻影であるから、不可能に思えるような造形も可能なのであるという認識が要る。

それは一種の信仰に似ている。といっても、神や仏が対象なのではない。力への信仰だ。それも武力や資金力ではない。形而上から形而下を支配する力である。あるいは形而上だけでコントロールされる局面が大部分ともなろう。

はじめ、その力の存在を知らなくてもよい。また、何らかの専門書を読んで学ぶ必要もない。そのときが来れば、ひとりで目覚めさせられるものなのである。ネアンの場合はそうであった。

人生の目的がばらばらの方向に向いている場合は困難でも、あるときに一方向に揃う場合が出てくる。何らかのきっかけがあるわけだが、本人にもその方向において、不思議なほどの導きに驚くようになる。そうなれば、その感動を原動力にして自分なりの分析と予測をしておくべきだ。

すると、次の導きとして、新たな発見がひとりでもたらされる。それが予測されたものであったなら、シンクロといって、自分の向いている方向に確信が持てるようになる。それが魔法使いの道に踏み出した証である。そこで、さらに分析と予測を重ねていくのである。

巷にはガイドになる情報に満ち溢れている。だが、そのすべてを理解しに行こうとしてはならない。魔法使いは、それらの中から必要なものがひとりでもってくるのを待つのである。ただし、鈍感であってはならない。内在の導きにも耳を傾けることも大事だ。

突然閃いたことは特に大事だ。それが調べものに関するのなら、直ちにすればよい。すると、普通では見つからなかったような情報も、不思議に瞥見できるものなのだ。ただし、チャンスはそのときだけに終わるかもしれないことを考え、きちんとまとめておかねばならない。

多くは相互作用関係の強い異性や友人などの人物を介して、シンクロがもたらされる。それらすべてにおいて、ひとつとして漏らさない態度で、分析と考察を重ねるのである。

そうやって方向性に基づいた理論が構築されれば、それが信仰の砦となる。それは力、魔法の力の土台になるものであり、魔法使いがどのような生の中においても維持し建設していかねばならない王国となるのだ。

魔法の諸力を確立していく手順は、こうなる。

まず、おや？と思う気付きから始まる。それを「兆し」という。それを別の直感と結びつ

けて、着想がなかなかいいじゃないか、と、ひとつの感動を得る。それを「脈」という。次にそれが壊れないための論理付けをする。それを「境」という。いわゆる分析課程だ。発展して理論までいけば、この信仰に関する一種の「結界」となる。「境」とは、土台を固める砦のようなものだ。ではそこで、この信仰が正しいとしたとき、次に予測される事柄が自ずと湧いてくる。それを「見立て」という。ただし、これは受動的な「見立て」だ。成行を眺めているうち、予測どおりのことが起きれば、これまた感動に繋がる。だが、それではそれだけのことでしかなく、魔法使いは慢心しただけで終わることが多い。だが、そうならないために、あるいはそうさせないために、多くの場合、そうとは知れないところで予測したこと

は起きているものなのだ。些細な情報として与えられ、分析されて始めて、魔法使いにのみ理解できるという、あくまでも力の増進訓練を伴う形でやってくるのである。

そして、循環の課程がほどよくこなれるようになれば、魔法の力が発揮されていくことになる。それは「見立て」を能動的な形にしたものであり、魔法使いの構築した「境」の範囲内であれば、新しい理論を作って、そこから予測された事柄を現象上に惹起していくのである。現象上とは何も視認できる所で起きることに留まらない。魔法使いが想像することのできるあらゆる世界が対象となる。

東洋魔法の理論にいわく、「兆」「境」「脈」「見立」のたゆまぬ循環によるのである。そこには厄介な典礼魔法の教育などは必要ない。自由にのびのびとしていて、それでいて一方向に集中した成り行くさまを、感動を伴いながら目撃することになる。

この新神話は、ネアンという魔法使いによって理論とされ、魔法の力によって世界に顕現していくものとなった。

魔法の起動は、さほどの厳格さはなくとも、一定の定型的手順を踏むことが肝要であることが分かるだろう。その理由は、造形されるべき対象となる現象はすべて元来、プログラムでしかないからである。それも魔法によって自動創造されるプログラムである。

プログラムは、決してあるがままに運行されるばかりでなく、ダイナミックに索引され、ローディングされ、オーバーレイされて、自由に造形力に富む働きにできる。

ネアンには、生死を別たず一連のものとして世界を捉える世界観があった。それはもしかすると、梵天がハイラーキーである故なのかも知れない。よって、新神話に語られる宇宙観世界観は、創造者たる梵天譲りゆえに正しいとネアンによって自負される。

彼の導いた宇宙論は、観念的ではあるが、コンピューターが説明用のモデルに採用されている。そこでは、小さなホログラムメモリーに300億年の膨大な歴史の情報が詰まっていて、それを逐次演算する最前線に我々の真我が関わっていて、観測し認識しているというものだ。

たった一台の高性能コンピューターで、彼の認識を賄うに十分であることに注意が要る。プログラムの隅々までが、この演算の対象になろうとも構わない。コンピューターは時空連続体として存在するプログラムの時間軸の適当な断面で切り取って、観測対象とするだけである。

ごく小さなネアンという者の約60年の人生一つだけであっても、何ら構うものではない。コンピューターにとっては、宇宙の歴史もネアンの一生も、プログラムの的に等価なのである。

かつてユングは幼少期に、なぜ自分は他でないのか、他であってはいけないのかについて考えた。我々考えるゆえに我あり、の考案者もそれを意図したはずなのだが、いいように歪曲されている。

主人公であってもおかしくない個々人。なのにどうして、自由気ままだが許されないのか。そこに横たわる奇妙で複雑なシステムもまた、プログラムの中の綾として存在する幻影でしかない。

すなわち、この世もあの世も、かつての映画マトリックスでいみじくも指摘されたような実態であること。本来、ありえないはずの幻影を我々は現実として認識している、させられている存在であること。それを補足する根本的な真理として、すべては唯一者・梵天の見た夢であり、我々の個々の自我を賦活する真我こそがその唯一者であるという真実がある。

その唯一者が夢の中で迷い込んだものか、それとも分かっているか、いずれにしてもラビリンス、魔法の迷宮の中で我々は彷徨っている。そういう夢の中に梵天もあるのだ。

かつて釈迦は、梵天から世界のありようについて教授を受けた。彼の時代に、梵天の世界

観を喩えて表すことのできるような事物はなかった。だから、いきおい精神論になり、哲学化してしまったが、今の時代なら、喩えられる事物（コンピューター）が登場しており、彼の時代と比べると、はるかに悟り易くなったと言えるだろう。

ただ問題は、世が情報過多であり、どこに真の仏の教えがあるやなしや分かり難い点である。いくらオープンにしても、縁あって見に来る者は僅少。またたまたま見たとて、書かれていることに価値を見出せぬ場合は、縁無きに等しいこととなる。

ネアンは何ゆえか、社会に出てからはコンピューターのソフト開発の仕事に入った。成長途上の花形産業というふれこみだったから、その道に進んだとも思えたが、会社への貢献は思わしくなかった。むしろ、コンピューターからはその動作原理を介して啓発されたことのほうが大きかった。

東洋思想では、この世は生々流転してやまない動的なエネルギーであり、形として現れるものはすべて幻像であるとしている。その思想が提起する「認識」というものの真相と、コンピューターの中で演算されて出される処理結果というものが似て非なるものではないことに気付いたのである。相似像がここにある。そう直感したネアンは、コンピューターの動作原理を元にした宇宙構造モデル概念を作り上げた。

1. 宇宙が階層構造をしているのは・・・プログラムが階層的に組まれているから
2. 下の階層が上の階層のありさまを観測できないのか・・・プログラムがそうなっているのだ
3. 観測される現象は心象風景（幻像）か・・・プロセッサの演算処理結果である
4. 個々人は個有の時空を観測しているのか・・・観測者中心相対論的プログラムであるからリエントラントであり、誰が何度実行しても構わないはずのものである
5. 未来のことはすでに定まっているか・・・始まりから終わりまで、言語で記述されたプログラムとして予め存在している（プログラムの保管庫には、過去のものも未来のものも同時に存在する）
6. プログラムの観測結果に個人的差はあるか・・・プロセッサには連想認識的組み立て能力がある。マクロ言語であればあるほど、プロセッサの予備知識に応じた相違が出る（催眠術をみればよい。認識結果はキーワードで索引された非常に多くのプログラムの複合産物である）

モデル化してみたとき、根底となる中央プロセッサの処理能力の超巨大さを想像しつつも、宇宙運行の原理の単純さと、その中で生々流転させられている我々の意識の果てしなくも空しい現実と直面させられる。我々の意識は、流転を刻々記録しているプログラム（映像）を一意に辿っていくに等しい。とならば、鳥瞰的立場に立てば、どんなに魅惑に満ちた経験も環境も、地位や名誉も、ちょうどマリオのゲームにいそしむ子供の興味に等しいことが分かるのである。高得点をマークしようと何度でもトライしてもいいが、いい加減に卒業せねばならない。また、心ある親であるなら、いつかは子供からゲームそのものを取り上げねばならない。

今、世の聖者たちは無限時間に近い生々流転の中で、自らの立場を高度化し、解脱に向かう途上であって、未だ下位にある有情たちに同じだけの時間の負担を求めている。それは、魂の進化という名の元に正当化された虐待でしかない。本来であれば、ゲームにはまった子らをディスプレイ画面から離すべき立場にある者たちが、ゲームを到達点の最後までやり遂げてから座を立てと言っているようなものなのだ。聖者とは名ばかりの徒党に過ぎない。

マトリックスという映画が2000年に登場した。そこには深遠な東洋哲学が伏在していると噂された。というのも、我々が生きている現実が、どこか知らないところから与えられた幻影である事実をあからさまにしたからである。インド哲学の神や聖者をもからかうというマーヤの概念を現在の利器を使ってモデル化し、その裏にある「慈悲深い神に似せた悪魔の陰謀」を指し示したことから大ヒットした。

いったい誰が自分たちの認識している世界が幻影であるなどと思うだろう。当面する問題に好むと好まざるに関わらず取り組まされて、必死で生きているではないか。だが、インドに発した思想は、瞑想を極めることによってしか分からないこととしながらも、マーヤ（幻影）であると言っていた。それを分かりやすい手法でモデル化したのがコンピューターの中で営まれる世界像の提示だったのだ。

ネアンはそのことをマトリックスの20年前には知っていて、世の異端的学問の府で研究論文として発表していた。同学府の研究者たちの中で関心を示した者はごく少なかった。当時はインチキくさい波動商品が、学府内の寄付金の流れと共に、何の裏づけもなく新しい科学としてもてはやされていただけであった。

何でも、魂の進化のレベルは、社会的地位と比例するらしい。統括的立場や指導的立場の人は、そのまま向こうの世界でも階層的に上位であるからだと、インドの聖者たちは言う。

ネアンはいくつものアイデアの専売特許を抱えていたが、まともな日の目を見ることなく社会に埋没させられていた。成り行きがそうなのだとすれば、それはネアンの魂の程度でしかなかった。

世の荒波も知らない新参加者のこの外野からやってきたがゆえに、何も起こせない。魂の程度に応じるなら、その成果がどんなに低質で無価値のものであれ、ナントカ喜劇の面々の提示する専売特許のように社会に登場していくのであるのに。

人間を虚仮にしているとしか言えないようなものが優先されるのも、魂の程度によりけりというのだ。

そこには、人間として転生を重ねたベテランを指して上位にあるとする思想がある。

それは牢屋における囚人の間で取り決めた牢名主のしきたりのようなものだ。

それは真実がこの世では必要ないとされていることを意味する。理由は、最初から、この世が有情を獲り込んで放さない設計思想に基づくものだからである。

ネアンには、ただ真理の探究の精神が培った成果だけが残った。若かりし当初は、こん

な画期的なアイデアがあるのにと焦りはしたが、所詮ホンモノは世の塵芥にまみれるものよと開き直ったところで、自己申告的逝去年の50歳を迎えようとしていた。

だが、新参者でよかったのだ。新しい役目のためには、彼が新参者であり、マークされてはならないことが重要だった。このエクストラは、天国から地獄までにある、あらゆる魂に共通の門戸を開放しているところである。どんな人（魂）種も、隠れ住むことができるのだ。

自信喪失気味のネアンを賦活したのが、カンナオビだった。会わずとも文通と言葉のやり取りによって、ネアンの自信は微妙に深まっていった。

それが新たな役目を帯びるのに重要な下地を形成したのである。

この社会を推進する神は、彼を捨てる神であった。だが、新たな役割を付与した神は、彼を拾う神であった。こうして、ネアンの中で、神の位置づけが決まってくることになる。対立構造は天界にあり、正神と邪神のそれである。組するべきは正神であると心に誓うことができた。

正神はかつて世界を幸福裡に統治していたが、邪神の侵襲と姦計によって封殺されてしまった。だが、聖書にも書かれる邪神の目論む世界終局計画にあわせて、正神復活と邪神掃討がなされるという大局観が、イナンナの大本思想によってもたらされた。

ネアンでなくては解けない様々な鍵が携えられていた。

鍵を開けるごとに魔法のように励起された力は、持ち前の宇宙観の範囲を超えて所狭しと暴れまわった。そしてイナンナが、作務員の役目の終了と共に、痛烈なビンタをネアンに食わして去った後、ネアンの痛手を癒し、更なる鍵を与える者として、カンナオビが再来した。過去世から連綿としてネアンと共にあり、初めに現れて、しんがりに戻った永遠の女性原理であった。

紆余曲折がテーマであるかのようなマトリックスの世界。ゲンがいみじくも言い残した悔しそうな言葉、「この世はマトリックスなんですよ」の響きが、聖徳太子の「世間虚仮唯仏是真」の響きとともに悲しさを醸す世。

奇しくもマトリックスに出てくる救世主、主人公の名はネオNeoといい、いま現実にネアンNeanが救世主として、マトリックスに立ち向かう。その意味は前者がNew other後者がNewanotherどちらも「新しい別のもの」を意味している。

「月の支配の20年は過ぎ去る。7000年には別のものが支配しているだろう。そのとき太陽は日々の運行を停止し、私の預言も終わりになるのだ」とミカエル・ノストラダムスは預言している。

虚仮とはいえ、このマトリックスはネアンの人生にたくさんの恩恵を用意してくれていた。

辛い差配に泣いたとはいえ、彼には最も偉大な魂がミソギという産みの母、育ての母としてあてがわれていた。辛く険しい荒波が人生模様とすれば、どれほど遭難しそうな時点で救助してくれたか知れない。母以上のこと、執事となり、女中となり、家来となり、そのとき必要となるありとあらゆる便宜を図ってくれた。その恩を返すこともままならず、自分の役割をかるうじてこなそうとしている。そのことを以て恩を返すとするしかないが、今後病に倒れたりしたなら、この図体を預けることなどできようもない。健康な五体で少

なくとも母を見送るまでは過ごさねば。その幸運までマトリックスが用意してくれるかどうかは定かでない。

弟のマリオとは幼少期によく喧嘩をした。マリオは長じてから、兄である者に対して遠望配慮を欠かさぬ生活を送った。不便を押し、単身生活を通し、唯一住居に関しては贅沢を装ったが、必ずしも幸福ではなかった。そして、兄亡き後、母を代わりにケアし見取ることになる。兄はいったい何をしにここにきたのかと思うほど、世間的な事跡とは無縁であった。その自由をマリオはじめ周りが保障していたような人生であった。神話をまるで写し取ったような仲間もいた。ネアンが山幸なら、海幸に相当する兄のような仕事仲間がいて、おりにふれて世話を焼こうとしてくれた。戸の国の日の出嬢は海幸が紹介した女性であったが、海幸山幸は神話的に折り合いが良くないせいか、うまくいかなかった。どこか父に似ているとネアンは思った。が、共に何かをやったときには、たいがいうまくいかなかった。心は通じ合うものがあるけれど、どこか反発がある。それが父や兄に対する思いというものだろうか。ネアンは思ったが、その父と兄はじっと見詰めてくれる存在であり続けた。

ネアンは国の先行きに危うさありとして、家族のために対策をあれこれと講じようとした。だが、保有するなけなしの資産さえも管理しにくいものにしてしまった。このために、預金の在り処や運用先を記しておくことにした。というのも、いざ事態が起きるときまで生きておれる自信が持てなかったからだ。体力が、心肺機能、脚、肩と弱り、身体を引きずようになりつつあると感じていた。それはまるでこの国の病態を体現するかのようであった。

ヤマトスクネはネアンのひとつの神話キャラクターであったが、日本の精神を表す人物である。日本が日本でなくなるときに、ヤマトスクネの命も終わる。ネアンの命は国の命と共にあるような気がしている。

1000兆に達しようという負債は、どんなきっかけによって国家破産の事態となって顕在化するかわからない事態である。1000兆円とは、世界全体のGDPよりも大きい。日本一国だけで破産処理が効かず、ブラックホールに吸い込まれる如く世界は不安定化し、第三次大戦でさえちょっとしたきっかけで起きてしまうだろう。

だが、日本が奇跡的に助かるなら、ネアンの命も助かることになる。

人類に解決不可能でも、宇宙からの応援という手もあるはずだ。日本や世界がとんでもない目に遭う前に、世界が救われるなら、ネアンは生きて未来に臨むことになる。

ヤマトスクネは、神武東征を瀬戸内海で導いたとき、亀の背に乗り両手を鳥のように、羽ばたかせていたという。今ネアンが励行しているのは、夢見の体の朱雀の羽ばたき練習である。

ネアンは今、神武軍ならぬ正神軍を導くつもりでいるのだ。神武軍は何も宇宙船であってはならないわけではない。正しい目的を打ち立てて来てくれる宇宙からの応援なら、それが一番であろう。

イナンナは、悪しき性質の者たちにも生きる理ありとして、彼らの上に照る月でありたいと願った。それがともすれば手抜きを生ぜしめるタイプの正神的優しさから来たもののようなら、イナンナは職員として厳しく処断されねばならない。この手の思いが、いつのときにも理想郷の願いに対するブレーキになったからだ。

持ち前の理想に従ったのなら、黄泉津大神として邪悪の教化にあたるのが望ましいという裁定にもなろう。そして、教化を見事果たして後、参加を望むのなら、こちらの宇宙に良いポストが用意されるだろう。

そもそも、最初はマリオのゲームのような着想が、在来の宇宙の設計思想にはあった。臨場感、臨在感を求め、精神移入をして面白みを出そうとしたゆえののめり込みが激しくなり、ソフトにも邪悪な展開が盛り込まれて、このテーマパークは好評となり、いつしかそれらのソフトは、有情を閉じ込めるためのものになった。

どこにでも見かけるゲームソフトにはまる子供の姿。パチンコにはまる大人たち。こうした多情な彼らもこの宇宙の存続を希望する側に列せられていくに違いない。彼らの希望と自由までは強制的に奪うことはできない。

彼らはまとめて向こう側に置かれるかも知れない。目を覚ますための処断が下されてなお、邪悪なゲームに没頭したがるなら、放っておかれはしない。その間、イナンナが指導の任務に就くかもしれない。見事、指導が叶ったなら、イナンナも戻ることになる。しかし、その間、在来宇宙は黄泉の国として位置づけられ、そこにある有情は新しい宇宙への参加を拒絶されてあるだろう。

イナンナは、自らを月に喩えたが、まさにイザナギと決別するイザナミであった。月はツクヨミ（就く黄泉）とも旧神話では呼ばれている。新神話を望まず、旧神話に就いた者であった。

だが、そうしたネアンの解釈の前に、イナンナは反省して、白蛇となって協力を申し出てきた。

「では、どうしてあのとき裏切ったのか」とネアンは問う。

すると、「カンナオビこそが来るべき方であり、職員として私はお膳立てをしたのです」と語った。

「それは分からないわけではない。邪神の裏をかく工作にはそれなりの手順が必要だから。二年があなたの期間だったと言った。では、どういう段取りがなされていたのか」

「私は玄武として、あなたに宝のありかを示し、白虎と会座が果たせた時を得て、青龍にあなたを返還することを告げました」

「邪悪に染まった者を含め、有情全体を救うというならともかくも、邪悪の領域を残してやれというのは、どういう理由か」

「あなたとの別れを誘うための方便でした」

その言葉は、事情に明るい正神たちの涙を誘った。

だが、ネアンは言う。私は単純に信じてしまう方々とは訳が違う。これとても妨害の意図なきにしもあらずと考えて臨む。いずれにしても、その領域が残されることになるなら、向こうに置かれることを覚悟しなさい、と。イナンナは、涙ぐみながらも頷いた。そこに梵天が現れて言う。

「待ちなさい。みんな私の前では純白な魂である。訳あって、修辞された性格を帯びているだけのこと。この宇宙を離れたとき、その真実が明らかになるだろう。ただ演劇を演じていただけであったことを。仲間同士いがみあうのはよして、みんなして故郷に戻ろうではないか」

ネアンはイナンナを見て苦笑した。

「では詫びの証に、私が正神軍を導くときの乗り物の亀になってくれ」

イナンナは微笑んで頷いた。

こうした形而上の経緯があったために、新神話を書くネアンに、イナンナの脱魂のことを着想せしめたのであった。カンナオビには白蛇のキャラクターが加わってきていると。またそれが後に、ゲンの夢にも現れたのだった。イナンナの魂の翻意が先であったのか、神話がそのように誘導したのか、その辺は定かでない。

カンナオビ、神界のクーデターに立ち会う

カンナオビは、神界における献身的な機織作業を長くこなし、積善の徳を備えていたゆえに、不自由過不足あるエクストランに至っても、希望が叶えられていく生涯を送った。

誰にも気付かれず、ひっそりと鉢の片隅に咲いた春蘭のような存在であったため、天仙邪神といえども気付かず、時計仕掛けのようにして頭角を現すタイプの密命者であると分かってから、遅ればせに毒牙を繰り出してきた。それも、カンナオビの嫉妬や悲しみという些細な心の過ちに、蠅がたかるようにして。

邪神は、かつてもそうであったように、我は光なりと称する者を、ネアンの不在に乗り送り込んできた。カンナオビは、半ばやけ気味に、そこでしばし官能の疼きを、光の繰り出す機械仕掛けによって慰めた。だが、光と称する者は邪悪の光と言うべき者で、かのイエスと同様、人を隷属させることに目的を見出していたのである。

だが、ネアンが彼女の元に立ち戻るとき、光という者はどこへともなく消えていった。

故事に言う。真の光が現れれば、暗闇も贗の光も消えてなくなる、と。

イナンナが、非常な手段でネアンと別れたのも、カンナオビの役割が邪神の策謀で費え去ることへの正神側の判断だったとも考えられる。

白蛇イナンナはいったん正神の導きで肉体を離れ、頃合を見て、魂だけで青蛇カンナオビと合流を果たしたのだ。

ならば、正神の配慮は智謀に長けたものであったことになる。

200X年6月のある日。カンナオビは、未明に過去世の夢を見た。

カンナオビは宮廷の機織り女であった。宮中の晩餐会の最中、突然部屋の中で爆発があり、ぼうぼうと煙が立ちこめ、あたりは怒号が飛び交い、逃げ惑う神々で蜘蛛の子を散らすように騒然となった。

カンナオビは直感した。暴動に違いないと。そういえば、国王様の近辺には、ただならぬ噂がふんぷんとあったのだ。国王の政治を良く思わない重臣たちが、もしかすると何事が起こすのではないかといったような。

カンナオビが分厚いカーテンに身を隠していると、ネアンが目の前で人々の誘導と指図に忙しくしており、たいへんな事態であることが察せられた。警務大臣補佐官であるゆえに、こうした場合は最後まで残って責務を果たさねばならないのだ。

ネアンはすぐに、カーテンの下に脚を覗かせているカンナオビを見て取った。

「出ておいで。ここにいたらいへんだ」

そこに執務室から書類を運び出してきた文武官が、「重要書類はこれで全部です」と、彼の元に置いて行った。それをネアンは配下の女官に手分けして渡す。ぴったりとボディーにフィットした黒装束に身を固めた、こうした事態のために、彼の元で訓練されてきた者たちだ。だが、持ちきれぬ以上に文書の量が多かった。

「後の者はどうした？」

「大広間で殺されました」

「そうか。では、この分を頼む。直ちに城を抜け出し、XXXXで次の指令を待つて欲しい」

「心得ました」

ネアンは心配そうに見ているカンナオビのところに書類を抱えてやってきた。

「謀反が起きた。カンナオビ。君は中立の立場ゆえ、この国に残ることもできる。だが、もし我々についてきてくれるなら、共に来てくれ」

「はい。ついて参ります」

「分かった。ぼくはまだしなくてはならないことがある。みんなで手分けして、必要なものを持ち出さねばならない。君はこの文書を持って逃げてくれ。近々、落ち合おう。

さあ、こっちだ。裏口から逃げるんだ」

「どこで待ち合わせればいいの？」

「まず、XXXXに行くように。そこに皆がいる。最終的にはエクストラン（外の世界）になるだろう。緊急避難にはやむをえない所だ」

「はい」

「愛しているよ。いずれまた」

「はい。私も愛しています」

夢見の力によってカンナオビは神界における鮮烈な記憶を追体験することができたのだった。

この神界における事件こそ、日本神話にいわく「スサノヲの反逆事件」だったのである。だが、神話はえてして伝承の継ぎ合わせ。実際にあった歴史的事実の原型を留めるも、為政者サイドの都合のいいように改訂されていたりする。

このとき反逆したのは、国王の側近たちであり、国王一家は暗殺され、といっても神霊であるゆえに不死であるため、強い魔法を使った呪封が行われた。そして、首謀者に仕立てられたのが、たまたまクーデター当時に来訪していた、豪勇のスサノヲだったのである。国王の国常立尊は魂を細切れに分割されて芦別岳の地下深くに、王妃の豊雲野尊は鬼界が島の地下にそれぞれ封印されたのである。いりまめに花が咲くまでは、出てくることができないという言葉の結界呪封がなされていた。いりまめとは、熱が加えられて死んだ豆である。それが芽を出し花をつける頃とは、まずありえない未来ということになる。

ここで識者なら容易に推測がつくだらう。今、人界にある有情たちの多くに、この手の呪封が施されているであろうことを。これを映画マトリックスは見事に解明して、「閉じ込められた者」と評している。

ここに出てくるエクストランとは、まさに神界からもプログラムによって作られたと認識されている仮想現実の世界、人間界のことである。神々なら、教導することはあっても、あえて下生することを忌み嫌う場所。ゆえに、避難場所ともなりうるのだ。

それ以来、神界は暗黒に閉ざされた。正義は途絶え、悪事が蔓延するようになった。力の勝る者が弱い者をいのように扱い、神界の階層構造社会たるや、マフィア社会のようなものになった。

日本神話は「岩戸別け」を既成のこととしているが、それは神界における希望的未来預言であって、未だ到来してはいない。

ただ、しだいに心痛める者が出てきて、人界の悲惨な現実から学ぶべきことを唱え出し、やや神々の性向も温情的になる傾向にある。下界の議会制民主主義は、その現れである。その先に、かつての神界のよすがとまではいかぬまでも、正されていくに違いないという希望的観測がなされているのである。

だが、もし国常立尊であれば、そのようなやわな展望を許すはずがない。また、本来それだけの力を備えた神であるから、大元帥明王とも言われている。だから彼の音信は、地獄界において、正義と邪悪を厳しく吟味し、亡者を振り分ける閻魔大王として活在している。その神話は、国常立尊がエジプト神話におけるオシリスと同体であることを示している。いまオシリスは冥界の王であるとは、すなわち閻魔大王のことである。

では、クーデター前の神界はどうだったのであろう。

国常立尊は、神界にあっても、世の無常を感じていた。彼が最高主神に抜擢されたときもよからぬ輩があまたおり、彼が為政するに当たり、規則や法制でいくらその発生の源を断っても魂の根からくる邪悪さはいかんともしがたかったのである。

特に出雲に起きた役人の不正事件には、その根の深さを思い知らされた。極めて秩序だった平和で満たされた世相があつたにもかかわらず、過分を希う輩による不正。それによって、不当にも搾取された被害者たち。そうした不正事件は続出したのだ。

国常立尊は、世の裏の実情を知っていた。神界といえども、マトリックス的実在であること。いわゆる六道のことごとくに、非実在性、フィクション性が内在すること。そうである限りにおいて、有情はしっかりと足を地に付けた思いに根ざすことができないこと。

ちょうど人が舟で航海するがごとく、船底の下の深海にはどんな魔物がいるや知れず、ただ舟にあるという安全信仰によってのみ只今があるという現実が、彼の思いを辛いものにしていった。神々の思いに影響を及ぼしている魔物の存在（魂を持たない種族の悪意、策謀）がすでに知れていたのである。

国常立尊は、真の自己を探すべく黙座して瞑想の旅に出た。思いの中の不安とは裏腹に、心の底に平安の領域のあることを感じていたからだ。彼は瞑想の深み、もしくは高みにわけ入ってついに安心の主を発見した。

そこにいたのは、梵天であった。

「あなたは誰ですか」

「私はあなたです」

「どういうことですか」

「私はあなたの目や耳や意識を通して見る者であり、あなたをあなたたらしめている者です」

梵天は光とエネルギーを放っており、それがまるで川の水のように彼の中に脈々と流れ込んでいた。

「ああ、この幸福感。永久に続くかと思われるこの安らぎ。私をここに留まらせていただけないですか」

「いいですよ。私の中にお入りなさい」

光明と至福に満たされたとき、ふと国常立尊は思った。やらねばならないことが山積していることを。そう思い出すや否や、どこからか現れた白い玉が、輝く梵天に向かってぶつかっていき、爆発して砕け散った。

国常立尊は、それも希望者に違いないと気付くと、急に恐ろしくなり、後ずさりした。すると、国常立尊は後ろに引き込まれるように、瞑想している自分の立ち戻ったのだった。

「しまった。自我意識が破壊されるという惧れによって、退転してしまった」

再びあの存在に会いに行こうと瞑想したが、何度トライしても、ハードルが高くて至ることができない。

「真実をお聞かせください。我が主よ」

すると打てば響く乳鉢のごとく、返事が返ってきた。

「私があなたという夢を見ているのです」

国常立尊は悟った。内在する自分こそが、かの人であると。

かの人目の目となり耳となり、自分が動いていると。かの人も、自分と同じ想いを経験している。

「ならば、よいお知恵をどうか・・・」

執政の場に戻った国常立尊を待っていたのは、どこからともなく渦巻く黒い陰謀の影であった。

それゆえに、いっそう正義をかざして、粛清の処断もなさねばならなかった。それが苛辣を増すにつれ、為してしまったことの不正がいつ発覚するか恐れて、陰で徒党を組む輩があちこちに出てきた。

その数が満ちる頃、彼らの前に、ついに魔物が姿を現し、直接指示を出したのだ。国常立尊を殺してしまえ、と。

封神されて今があることを知らぬ神々は、それが神界をコントロールする天仙の差し金であろうとは気付くよしもない。こうしてクーデターはいとも容易に成った。

国常立尊はもうもうたる煙の中、未だ見たことのない魔物によって羽交い絞めにされていた。前に立っていたのは、きらびやかな甲冑を身につけた武将のようであった。毘沙門天のように見えたが、そうでないことはその装いと態度によって分かった。

「国常立よ、もはやこれまでよ」と、するりと刀を抜くと、それは青白く光るや、光を浴びた周囲は真っ暗になった。刀の妖気とでも言うか。

「魂をも斬ることのできる太刀がこれなり。再び生ずるなかれ」

そう言うが早いか、太刀は国常立尊に浴びせられた。羽交い絞めにしていた怪物の腕とともに、国常立尊は胴体を真っ二つにされてしまった。しばし甲冑武者は様子を見たが、彼の魂は強靱で、未だ死んではいなかった。

「おのれ。よほどの精神力と見える」

さらに縦横斜めと何太刀も浴びせて、一寸刻みにまでしようとした。

国常立尊はそのとき、自分の中にいてこの様子を見ている梵天に訴えた。

「梵天よ・・・魂のない者がいます・・・これは明らかに反則・・・処罰を求めます」

そうして息絶えた。

魂の断片の山からなにやら霊気が立ち昇った。

「何だこれは。まだ生き延びようとか」

甲冑武者はさらに断片を形がなくなるまで切り刻んだ。周りには、かねてより国常立尊に媚びへつらっていた側近の姿がいくつもあった。

「これで二度とお目にかかることはなくなるわけですね。バイオモドキ様」とまで言って

いる。

「まだ未練があるやも知れぬので、僧侶を招き呪封を行う」

と言うや、申し合わせたように、ひとりの僧侶が入ってきた。術に長けた太公望である。

「このひき肉を、ここより北東の方角の遠方に持っていき、ばらばらにして土中深く埋めなさい。この一塊だけは、地中最も深くに埋めるゆえ、私が持っていく。お前たちで残りを互にくつつくことのない距離に埋めてしまうよう」

「ははっ」

「かくなる呪詛を施そう。炒った豆から芽が出て花を咲かせるような途方もない未来に、再び日の目を見ることを可能とする、とな。こうでもせねば、魂ある者を冒瀆する云々と外野から横槍が入れられんとも限らんのでな。永遠なる魂には、ふさわしい未来展望になるであろうよ」

国常立尊はこうして、人事不省の状態となり、魂の不具のまま昏睡することとなった。

ところがこのとき、国常立尊の意識を通して梵天が事の仔細を確認していた。しかも、有情の中でいつものようにただ眺めて楽しんでいるのとは訳が違っていた。国常立尊が今わの際に託けしているのだ。それとともに、梵の全系を揺るがす外敵の存在をしっかりと確認したのだった。

こうして、いみじくも太公望が知らずに外野呼ばわりした全系の最高神に知れてしまい、大規模な邪神掃討プロジェクトがスタートすることとなったのである。

地を見れば天の如何なるかが推測できるように、以後、神界にも権力をほしいままにした策謀尽くめの暗愚な神が歴代の主神として輩出された。その影響を受けて、地からは勧善懲悪の理念が衰退し、正義と邪悪の戦いの局面において、前者の勝利することが稀になった。いきおい被支配者たちは上を見習うようになり、悪事も法に触れぬほどに適度にせねばと、折り目正しさを失い、魂の品位を下げていったのだ。

だが、神界は確かに“さ蠅なす黄泉”のごとしとはなったが、まだ地上界ほどではない。

正しくとも、大人しくしている神々があまたいて、人々を任意に導いていた。

だが、地上界は低い野蛮なプログラムの適用されるエクストランとなってしまったのである。

これが伝承に言う、失樂園の背景である。

失樂園の発生は、同時並行的に、クーデターを起こした邪な神々を掃討する作戦の事始めともなっていることに注意が要る。だが、神界のスパンは地上よりははるかに大きい。当然ながら、正しい者たちの間からは、ずいぶんひどい世になってしまった、何とか以前のようなまつりごとの世に戻して欲しいという思いの煙が幾重にも立ち昇っていた。やがて、悪魔邪神の支配は終わる日が来るという預言めいた噂が立つようになったが、なかなかそれは訪れようとしなかった。

神界の神々は、汚らわしい地上への下生を忌み嫌ったが、いろんなことが生じる魅惑的な実験世界ではある。

その地に赴く者は、本来、神々によるそれなりの加護が必須となる。それなしでは、裸でジャングルに行くが如しなのだ。この世にあって、幸せでいられる者、目的を見つけた者は、神々の加護と期待を必ずや担っている。感謝せねばならない。

国常立尊に仕えた忠臣たちは、付き従う者たちと共にこの忌み嫌うべきエクストランに至らざるを得なかった。この地だけが、お家再興の可能性を秘める舞台と目されていたのだ。忠臣たちは順次、あるいは時差をおいて、あるいは異なる場所へと、ちょうどパラシュートで目的地に着こうとする如く、マトリックスプログラムのジャングルへと降下していった。

すでにネアンの姿が下界にあるのを見て、カンナオビもイナンナも、飛行船から時間計測器で狙いを定めて飛び降りていった。着陸後は、勘を頼りに探す覚悟である。

彼らを胎内に受け取ったのは、先んじて降りた忠臣やその仲間であったりした。ネアンの場合は、真っ暗な中、銀色の蜘蛛の糸を伝いながら降下し、国常立尊の忠臣であった者の胎内に宿った。その後は、幾多の紆余曲折の中を彷徨ったが、結局は忠臣たちとの協力下において、抛って来る目的を見出すのである。カンナオビの場合も、忠臣やその仲間たちに加護されて目的のへと運ばれ、絶妙のタイミングでネアンに辿り着いた。そこには神界の異端の神々の加護があった。

イナンナは、先達から役を奪うようにして準備なしで突然降りてしまい、工作人員の資質と力だけで進路を切り開いた。彼女が旅の途中で邪神につかまり臨死に追い込まれたときには、異端の神々が体制側の神々と渡り合い、窮地を救ったのである。

ネアンも下で所在を知らせるアンテナを広げていた。後発の者が早く辿り着けるようにとの計らいだが、ネアンの顕在意識の知るところではない。こうしたことは、潜在した魂の意識のみが知ることである。

彼ら同一目的の靈団を“デブレークブリゲード”（夜明けの旅団）と呼んだ。

彼らを共通の神が加護した。その与える靈感によって、適機に邂逅を果たすべく導かれたのである。

異端かつ強力な正神たちは、主として蓬莱島に集まり、作戦会議を開きながら、エクストラランに至った者たちを見守っている。リハビリを終えて返り咲いた国常立尊が正神軍の総司令官となることは間違いない。

プロジェクトの作戦力が強まり、邪神たちを圧迫していくにつれ、正義と公正の執り行われることを願う者たち全般へと、加護の範囲が広がっていくことになる。だから、地上の人々よ。抑圧的な邪な神々につくのではなく、鬼や龍など、まがまがしいと思われがちな神々につけ。後者は、見た目は仰々しいが、有情の幸せなることを第一義とする神々である。彼らの真性は愛情であり、生命に優しい豊かなエネルギーである。

彼らが近づくと、心地よさで満たされ、心身の若返るのを感じるであろう。

魂のない者の化けた神にしがみついても、精気を奪われるだけである。魂のない神とそれと結んだ邪神たちには人類への愛がなく、錯誤した価値である財貨や名誉や権力を鼻肩筋に与えている。鼻肩されぬのに、羨ましがってこれらを求める者には、おおよそ奈落が用意されている。

分際にあらぬものを取ろうとするなかれ。少ない中にも足るを知れ。それが安全の基となるであろう。

かつて立ち上がった者は多々いたが・・・ピント外れだった

虐げられた人々に対しては、そうあれと薦める正神ではあるが、邪神の支配下においては、生まれて一人前になるまでに、人生の目的が財貨や名誉を得ることのみ第一義として教え込まれる課程が強制されていて、よほどの気付きがなくては、正神の囁きも無になるものである。

気付いた者が、体制を改訂すべく立ち上がったことも歴史上には多々あった。だが、そのほとんどにおいて、ピントが外れていたり、正神が導いたにもかかわらず、正神の優しさからくる詰めの甘さによって、もう少しというところで失敗している。それが戦による改革であるなら、敗北を喫するという形で終わった。

知られる例では、聖徳太子、平将門、明智光秀などがそうであり、確たる天下人となり得たならば、どうあっても理想郷を生ましめる礎を築いたのであろう。だが、正神に属する天下人は、地位を辞退したり、適度なところで留め置いたりしてしまい、決定的な詰めに怠ってきた。そこに邪神はそれをさせじと、暗殺者を送ったり、あるいは別の強力な兵団を使って、脚を引っ張り混乱させた。

そうはさせじという邪神の計略と、もうこれぐらいでいいだろうという正神の手加減があいまって、そうした事態を招いているのだ。むろん、実現しようとする本人も正神的な心根だったから、複合的に抜かりが生じたのである。

しかも、無念の中に命を落としても、死なば執着を残さずの境に入ってしまう、熱意を継続できなかった。霊界に入れば、上位にある神々はみんな善で優れているという観念があるがゆえに、そこでは矛盾をよう披瀝できないのである。

こうして、死なば下界の沙汰は我に無縁となり、生前の志は失われ、まったくお門違いな転生を余儀なくされていくのである。まさに、邪神の思う壺にはまったマトリックス世界

なのであった。

こうして、せっかくの高志は懐柔され骨抜きにされてしまったが、下界にある歴史書には、彼らの高志が残され、引き継がれていった経緯がある。それも、ノイズ紛々たるエクストランなればこそそのメリットであった。

だから、このたびの計画には、夜叉性を備えた者が抜擢されねばならなかったのである。ネアンは、いざとなれば猛禽の性格を呈し、温情の微塵も見せないことで有名な神であった。

罪を憎んで人を憎まず、とは福沢諭吉の言葉らしいが、では捕縛され裁かれるべき罪とは何ぞやとなったときに、いつものことながら空論にしかならず、犯罪被害者の心情を癒やすものたりえないことに気付かされる。

そのようなはぐらかしの美辞に則ろうとするこの国の法制度下においては、この福沢の言葉は、トラウマだけを人の心に遺していく厄介な名文句でしかない。

形而上の事物が見えない、つまり盲目がなせる暗愚が覆っているからである。敵が見えていないのだから、原因も特定できず、それに勝てるはずもないのだ。

だが、ネアンの場合は捉え方がまったく違っていた。人を憎むのではなく、邪神を憎むのである。邪神は確かに見えたりしない。だが、経験的にその存在が分かるものだ。

世の矛盾に晒され続けて、それすらも感受できないなら、世の科学万能教育に完璧に洗脳されているとしか言いようがない。御説の確率論に従うような事象はどこにもないことを知らねばならない。

そこで障りをもたらず邪神という表現は、見えざる厄介な実体を、的確に捉えているはずである。それは怖いと思えば怖いかもしれないが、世間に炙り出してしまえば、世論の高まりに打ち勝てないのも彼らなのである。実態を晒し、みなで注視することが重要なのだ。ネアンは元々、世の矛盾、不合理の一々をことごとく邪神のせいであると断定してかかる癖があった。たとえ人が起こした邪悪な事件といえども、その背後にある悪しき上位に対して怒りが向く。というのも、常に神という存在と対峙して、取引してきたからである。審神者の長きに渡った職制がそうさせたとも言える。そこには、決して良い神ばかりではないゆえの、切り分け判断の目が培われているのである。

さて、罪の実態が邪神にありとすれば、少なくとも犯罪被害者にとっては、仇敵として確立できよう。邪神をこの際、天邪鬼と言い換えても良い。実態のつかめない原因に牙を剥くほど疲れるものはないから、ぜひそうなされたい。よけい曖昧になったとお考えなら、死した後の自由度を回復したステージにおける仇討ちの決意だけはしておかれるよう。こうすることによって、正神側に自ずと就くことになる。

だが、人は神に実力的にかなわないから、正神に加護を頼むべきである。あなたに内在する梵天に救済と制裁を求めるよう。

さて、この傾向は転生を経てなお持ち続けるネアンの特質であった。彼はドン・キホーテ的な性格だったから、見えざる敵が問題ならば、それが見える世界に入った後、報復の行程を踏もうと決意するのである。

ネアンは、理論を熟知した者であるゆえに、生死を超えて自らの任務を継続的に遂行できる。現世における仕事は、神界への影響力を持つ仕掛けを用意すること。そして、神界に入ってから、現世で培った邪神掃討の精神を、徹底して実行に移すことである。優しさや妥協は一切ない。もし武功なく敗れたなら、魂を途絶する。あるいは、少なくとも敵の大将を刺し違えて倒す覚悟でいる。

(2014年になって二つの情報もたらされた。ひとつは未来から来た韓国軍人の2066年情報。もうひとつは、すでに月の裏側に降り立った宇宙飛行士の目撃した衝撃的光景の話である。どちらも、ネアンのこの決意を反映したかのような情報であった)

だが、梵天は、魂を途絶するのではなく、この問題の宇宙の外、つまり外野に退避させるつもりでいる。正神軍が敗退したなら、この宇宙で共に戦った忠臣や工作人員たちにも危険が及ぶ。それゆえ、いっせいに外野に引き上げさせる手はずなのだ。カンナオビ、イナンナ、ミソギ、ツン、マリオ、ゲン、シノ、海幸などなど。そこは元あった広大な梵の全系という世界。生成衰滅という理念などに規定されない、テーマパークに取り込まれる前の故郷なのである。

誰が永遠不滅の宇宙など見当たらないと言う者がいよう。元あった故郷の記憶をなくすほどに洗脳されている者の言というしかない。

だが、神界での正神大勝利の暁に、理想世界の登場なるなら、ネアンはそこにいようとするだろう。そこでカンナオビを妻にしてしばし過ごし、梵天の認可を得て二人で小さくとも幸せな理想宇宙を創る。（それはもちろん外野でもできることであるが）

たくさん縁ある有情を彼女の子宮から生み出し、協力して宇宙で育み、すべての子孫に幸せを享受させるだろう。

その新しい宇宙に招かれるのは、この世で正しかった者、世の弾圧や軋轢に苦しんだ者、いじめられた者、世の不合理的に心痛めた者、不遇に世を送った者、そして苦しみのあまり自殺した者たちである。これらの者たちは、ことさら優しく手厚く迎え入れられるだろう。彼らは、痛みが分かる者だからである。ほんの少しガイダンスするだけで新宇宙に参加できる資質をすでに持っているからだ。

いっぽう、殺す者、いじめる者、嗜虐的な者、他の痛みを理解できぬ者、権力誇示の者たちは立ち入れないところとなる。これらの者は、邪神と性質を一にするからであり、諸悪の限りを尽くした邪神よりはまだしも罪が軽いとしても、殲滅もしくは追放の対象となることは間違いない。

カンナオビはある日、簡単な水彩画を描いて、感性の豊かさと才能を顕わした。ネアンがそれを見たとき、郷愁ノスタルジーを禁じえなかった。まるでしばらく離れてしまっている故郷のように思えた。愛しいカンナオビがそこで待っているように思えた。いずれ、共に暮らすはずの場所のように思えた。

彼女は次に、自分の家の中のアクセントとして飾りたいと、感性のありったけを投入してステンドグラスのデザインをした。それを見たネアンは、またもノスタルジーを味わった。前者は風景であったが、この場合は抽象的な幾何学的デザインであったのに、ネアンは自らの中から愛情が春日井のように湧き出てくるのを感じた。

顕在意識のカンナオビは、そうとは気づいていなかった。ネアンとは関係ないものと思っていた。だが、潜在意識は、これを見てくれるであろうネアンに対して、ひとつのメッセージを送っていたのだ。

円を基調とした幾何学模様で青を主体的に使った配色であった。デザイン的には単純であったが、ネアンは描かれた形に魅せられた。青い配色で母体があり、それはベールで顔を覆い隠した修道女のようにあり、母体の胎内に双子の赤子を擁しているようであった。母体は青い。それは神聖さ、謙虚さ、受動、消極さを示していた。胎内に宿るものは赤みを帯び、そこだけが能動、積極さを示していた。

朱雀と青龍が交わった。女は青蛇となって子を宿した。東海の海の中で静かに胎内で子の育ち行くを見守る母。母蛇は、父である存在に対して、このような形でメッセージを届けたのである。

顕在意識のカンナオビは、幾度もの生理不順騒ぎで、ネアンの狼狽を見、自分は潔白だという思いで、誰が妊娠などしているかと思っていた。だが魂は、幾度ものエネルギーの交わりから、魂の次元で子供ができたことを知っていた。それを創作という形あるものに押し出そうとするとき、顕在意識の知らぬ間に意図を吹き込んでいたのである。

カンナオビの魂は、あの妊娠騒動の中で幾度もの人生を体験していた。その経た年月は数百年にも匹敵した。ネアンもそうである。二人は魂の次元ですでに老夫婦なのであった。過去世とあわせるとどれほどの年月になるだろう。

ネアンはある朝、そのデザインを夢に見て、無性にカンナオビが愛しくなった。夢に出てきたときのデザインは、もっと丸みを帯びて（太っていて）青っぽく暗い感じがした。淋しげだった。カンナオビは疲れていないだろうか。修道女として今生を歩んでいるのに、身籠った気持ちになっていて、後悔していないだろうか。そう思い、そのデザインの図柄を介して、カンナオビを抱きしめた。愛らしく愛しいカンナオビ。君をずっとずっと愛し続けている。少しも君のことを思わない日はない。いずれお互いがリザーブしあっていたことに気づくだろう。あと高々数十年じゃないか。わずかの間だから、下界に遠足して、たくさん見物してくるのもいい。

すると、その直後にカンナオビから、お声が聞きたいと連絡が入った。このステンドグラス絵は心と心を繋げる窓の役割をしているかのようだった。

ネアンは思った。自分が死んだとき、カンナオビのもとにただちに至りたい。だが、脳が死んだ時点で記憶というものも消滅するだろう。そんなとき、このデザインなら必ず魂にも記憶され、この象徴を通してカンナオビに辿り着けるに違いない。カンナオビは物覚えの悪い自分に道標を提供してくれたに違いないと思った。

新たな宇宙は二人で育てていかねばならない。忘れてはならない命題がシンボルとして目の前にあった。

ネアンはステンドグラスに仕込まれるであろう母子の部分をレタッチソフトで切り取り、カンナオビがネアンの象徴だと考えてプレゼントした天使像をカメラで撮って写真にして、天使の抱く猫に代えて天使の膝の上に置いた。

すると不思議なことに、写真は母子を中心にして輝き始めたのである。ネアンはそれに見とれていた。光は写真の範囲を超えて放射状に部屋全体に広がっていった。さらに壁を通り抜け、さらに外界にどんどん広がっていき、やがて視界全体が白く透き通る光に包まれてしまった。

ネアンはかつて、このような光景を一度だけ見たことがあった。そのときは、自分の気が違ったかと恐怖して、懸命に元に戻そうとした。だが、このときは違っていた。ネアンは何物にも造形されざる「空」の中にいることを悟った。あらゆる創造のエネルギーがそこに存在していた。

カンナオビ。私はこの「空」にい続けたい。だが、君と共に、二人でプランした宇宙を創ることもできる。カンナオビ。どうすればいい？

「空」であれば、二人は永遠に不可分の存在として続ける。宇宙を創れば、君と分離してストーリーの中に生きることができる。どちらがいい？

カンナオビは、「光だけであなたのお顔が見られないのであれば、うれしくない。それにおなかに子供が育っています」と、おなかに手を当てて黙した。

分かったよ。ともに宇宙を創るという夢を果たそう。君の胎内のプランを実行しよう。ネアンは身ごもったカンナオビを優しく抱きしめた。その愛は、来るべき新しい宇宙に普遍充満するところの愛と等しいものとなるだろう。そこにどのような有情が訪れようとも、分け隔てなく歓待されるように。

まばゆい光はやがて世界の中に溶け込んでいった。外界は見たことのある風景になった。だが、明らかに、新しい宇宙がロールオーバーされたことが実感できた。

まだもう少し、どんなことも起きるだろう。だが、その先に愛に満ちた未来が必ず待っている。カンナオビ。君と共に愛すべき未来が。

ネアンはいま一度昔を振り返ってみた。十六の頃、妙なインスピレーションを得て、自分を求道する菩薩に喩えたことがあった。それが最初だった。広辞苑を引っ張り出して、神仏の世界の構成や諸菩薩衆、諸如来衆の名前をたどった。そして、自ら「救世行法菩薩」と名付け、檜の角材に菩薩像の半身を彫ったのだ。

ところが、聖徳太子も救世菩薩の化身と自らを評していたことが後で分かった。それも、イナンナの実家の傍が太子のゆかりの地であるため、イナンナが特別に固執した人物が聖徳太子であり、この神話への関わりがあることをときおり訴えていた。太子町の斑鳩寺には、時代錯誤な遺物、オーパーツとも言われる地球儀がある。それだけでも心騒ぐことで、イナンナは宝塚の中山寺が何かの鍵を握るとも話していた。

だが、それよりもネアンは、あの八角堂と夢殿の八角堂の相似像、あの八角堂に現れたキンイロタイシと夢殿の太子の夢に現れた金人の相似像に興味した。この二つの八角堂は奇しくも等緯度上にあつたため、霊場の幾何学的配置の探索を手がけていた彼は、そのシンクロに色めきたった。金人がキンイロタイシなら、太子が毘沙門天をはじめとする四天王に武運を祈ったことと無関係ではない。

ネアンが聖徳太子について知るのには、理想のユートピア建設を、あのたいへんな時代にあつて志そうとして、最後に絶望の言葉「世間虚仮唯仏是真」を残して世を去つたことである。

「世間虚仮唯仏是真」は、あまりにも悲しい言葉である。むろん彼一代で理想郷ができるとは思っていなかつただろう。彼の志を継ぐ人たちによって、達成できれば本望と思つていたに違いない。だが、彼の子孫はことごとく殺害された。予言的なこの絶望の言葉には、彼が垣間見た恐ろしい現実があつたのであろう。

太子の手もとには、海外の資料があまたあり、その研究に手を染めていた。だが、多国籍語の壁は人生の短い期間における個人の能力には過大であつたろう。しかも、為政者という多忙な立場にあつた。

ネアンはまるでその事情をあぶりだそうとするかのような研究をしていた。聖徳太子に頼まれたわけでもない。自然に神話研究に手を染め、取り付かれるように解読した。西日本に線も引いた。こうして、歴史をコントロールしてやまない根源へと近づいていったのである。当時では測るすべのない情報しかなかつたときに、この情報過多の時代にあつて、太子の後志をまさに継いでいるかのようなのであつた。

そして淵源を知り、それに対抗し改定するためのルールをも見出した結果がこの神話であつた。

聖徳太子は、蘇我馬子に組して物部守屋を破つたときに、四天王の加護を祈つた。毘沙門天王はネアンに最も関わりのある神である。母ミソギは毘沙門天の縁日に生まれると預言されてその日に生まれ、しかも男ならば位人身を極めると二人の別修験者によって

預言されている。毘沙門天の別名はサナートクマラでありルシファーであり孔雀王である。

その二つとないルシファーの彫像はカンナオビによって東海の竜宮から運ばれ、誕生日プレゼントして、ネアンの書斎にあった。

ネアンへの質問

ある者がネアンに問う。

神話では、邪神も天仙も、世の乱れの元凶であると言い、殲滅の必要をはためかせているが、いっぽうでそのような存在はないと言っているのは、どうしたことか、と。

ネアンは答える。さよう、実際にそのようなものはないというのが真相だ。（すべてはプログラム群としてあるのみで、それを離れば何も無い）だが、仮の姿として、煩いの種子の邪悪が存在するなら、それを打ち破る仮の姿としての強力な存在も必要となるという道理である。仮の世を観測することが余儀なくされている限りは、仮の姿としての邪神殲滅のシナリオが存在しなくてはならない。もし、あなたがもはや仮の世に関わらずともよいなら、正神も邪神もいかなる階層構造も、もはや意味をなさない。囚われない心を達成できるか？それが無理なら、仮のシナリオによる安寧を得る過程を置くことも良いのではないか。釈尊はそれを化城に喩えた。たとえ真実は空であるとしても、嵐に晒される木の葉のようである中に、安らげる状態を求めるべきことを。

またある者がネアンに問う。

邪悪を嗜好する者もいることである。それは魂の自由というものであり、殲滅というのはやりすぎではないのか、と。

ネアンは答える。すでに章の始めのほうでも説明したように、邪悪を好まぬ魂もあまたいる中であって、教訓的な程度のものから逸脱したひどい邪悪が混交し、その傾向が許容されるようになれば、正しい方向を志向する魂たちが混乱し、絶望してしまうことになる。そこには多数決で先行きを決めようなどという身勝手な暴論があってはならない。支配神たる者が、宇宙存続の原動力にするなどというあたかも全体の利益になるかのような奇妙な迷妄の論理を組み立ててはいるが、実態はこの世に有情を取り籠める目的でしていることに他ならず、早々に支配神の更迭を図らねばならない。それを彼らが拒否し戦うとなら、我々が外野であろうがなかろうが、同胞の魂の救済のために戦うことになる。かつてのような生ぬるい戦いによる失敗の連続を教訓として、一毛たりとも漏らさぬ殲滅を掲げ臨む。このためには、一時の功あったイナンナすら外に置かねばならないこともある。

邪悪を嗜好する者だけ集めて別世界を創らせ、黄泉の国として残し置かれて然るべきという案もある。それが採用される可能性もある。正神の多くが賛成しているからだ。だが、邪悪嗜好の者は、正しい者に対して害を為すことにこそ喜びを見出すものである。そのように洗脳教育されてきた者たちだからだ。いずれ、時満ちれば別世界から侵攻を企てるだろう。だから、初期における邪悪の殲滅こそが私の念願であり、もし彼らの世界の存続を認めるとなら、こちらの世界は強力なファイアーウォールで防御されなくてはならない。だが、そのような手間取ったやり方より、殲滅こそが最大の防御策になると信じる。私は、折衷案的な考えしか披瀝できない正神たちの世界すら辞して、模範的な幸せの世界を妻と

共に創造し、それこそを強靱なファイアウォールで守るほうを取りたいが、それではまた神界に邪悪は忍び込むだろう。私は本当なら警護の巡回に赴く手間さえも省きたいのだ。

正神の世ですか。面白みのない世界を創るのですね、とある者が笑う。それに答える。魂の嗜好する世界を各自が選び取ればいい。あなたのように戦闘の好きな魂は、黄泉の国で同好の士と闘えばいい。相手も倒されまいとするだろうから、勝負も楽しいものになるだろう。それを愛好するなら、そこに行けばいい。ただし、そのような場所に戦闘を愛好できない者がいてはならない。もしいたなら、直ちに救い出されなくてはならない。ところが、今のこの世はどうだ。好き嫌いに関わらず、多くの者が関わらされている。支配神の暗愚もしくは横暴というしかない。

正神の世界も、曖昧なものとなっては良くない。トータル的なシステムの中に、博物的な邪悪の名残を歴史として教える見聞のシステムはあって然るべきだろうが、見学者に魂の墮落を起こすことのないよう、しっかりとガイドする体制が要る。あなたの言う面白みは、十分に管理された中で慎重に適用されてあるべきだ。そうでなくては、邪神支配の世界と少しも変わらなくなる。

改善するから殲滅などという物騒な話にしないでくれと、支配神の側から頼み込んできたらどうする、とある者が問う。

ネアンはこう答える。

天にもある如くが地にもある。天の意向が地に反映している。地を見て判断するしかないモニターの我々にとっては、支配神の考え方を測る目安がこの世に与えられていると考えている。そのモニターのひとりが、分析に分析を重ねた結果、支配神が総じて信用するに足らざる者であると結論した。頼み込んでくる前に、地に長足の改善の兆し、もしくは改善の積極的な事実が認められることが重要だ。足元の乱れが改善されていないで、どうして元の設計思想の改善を知り得よう。口先だけの嘘話なら、邪悪な神の得意とするところであろう。殲滅の方針に転換はない。

もしたとえ、万が一彼らに恩赦が与えられ、なおかつ正神たちが過去のものもまだ見所があるとして、従前のシステムを遺すつもりなら、心根の邪な邪神を管理者として用いることは極めて危険である。すべて正神で接收して、博物化へと方向付けされるべきだ。邪神はいっさい関われぬよう、ことごとく殲滅するか隔離すべきである。

神界の神々は、もはやのんきに高見の見物をしているときではないことを知らねばならない。邪神の支配に加担した者は、すべて殲滅の対象に準ぜられるだろう。このたびの神界の大戦争は、関が原の戦とも言うべきものになる。かつてのように正神が、土壇場で温情を示したりするという過程はいっさい排除される。こちらに就くか、あちらに就くか、しかない。

中道、中立、隠棲、出家といった者は、事が終わった後で別の領域に追放されるだろう。こうネアンが新神話を書き進めているとき、地では学校でのいじめ問題が、政府レベルで深刻な議題となり、政府の施策として、いじめた側への制裁について法制化される運びとなった。いじめを傍観した者も、いじめ側に準じる制裁が課されるという要旨が盛り込まれたのである。ちょうどそのように処置されると思えば良い。

少年期を扱う学校や学童の世界は、神界の影響が真っ先に反映される。なぜならば、若年者が時間的に最も神界や霊界に近い位置にいるからである。神界や霊界の腐敗したあり様が、比較的ストレートに出てくる場所が学校になっているのだ。

いじめの精神は神界に発している。その影響をもろに受けた少年の世界を、外野である政府がいよいよ矯正に乗り出した。これは、幼児性の強い神界の支配神たちの行状を、より大人である神々が矯正に乗り出したことの反映である。支配神を取り巻く神々の構図に変化が生じているのだ。下界の様が、新神話と見事なまでのシンクロとなるのも、下界の鏡が神界だからである。

支配神一味は、もしかすると内部崩壊を遂げるかも知れない。それが最も穏便な成行かも知れないが、ネアンの書く新神話は、最も過激な殲滅作戦を敢行しようとしている。

もしも神界が、穏便な成行になりそうな場合は、その兆候として、北朝鮮の政権がクーデターなどによる内部崩壊として現れるはずである。過激な成行になりそうな場合は、北朝鮮の暴発として現れるはずである。今後一層、北朝鮮は世界の圧迫に晒され、二者択一を迫られるはずである。

あるいは別の現れ方もある。穏便な場合は、政府の正義に基づくテコ入れで、社会保険庁や教育委員会なる悪しき無作為の虚構の砦が解体されるか、抜本改造がなされるかするであろう。過激な場合は、戦争や経済破綻によって、政府そのものが根底から解体されるであろう。ちなみにネアンとしては、邪神根絶を念願するため、過激となる場合を想定している。

なぜネアンはこのような過激な方法を望むようになったのか。

それは、彼に対する邪神の執拗な妨害があったからだ。邪神は心の平穏を与えようとしなかったからである。

歴史は始めからこうなるべく決まっていたのかも知れない。

人生、誰しも忍耐して完了する。一寸先も分からない航路を辿るゆえに、失敗に失敗を重ねる試行錯誤の連続である。そればかりか、神々の守護がなければ、選択肢のひとつひとつに少なくとも半々の失敗が介在することになり、どのようにしても順調かつ迅速な成功を収めることは難しい。

そのような中、邪神は半分の確率であるべき失敗を、嫌いな者に対してはわざと高確率にし、一生日の目を見させない処遇に出るのである。

人は、不遇な人生だったと死の間際につぶやくかも知れない。そのようなとき、思い返すのは反省として、あのときこうしておけば・・・という判断ミスについてのことがほとんどであろう。だが、それは彼が悪いのではない。干渉する他者が介在して引き起こしているのだ。

プログラムがすでにそうなっているという事情もある。いずれにしても、彼にその人生を選ばせているのは、見えざる干渉者である。

それが正神であるなら、まだしも戒めであり致命的なものにはならない。だが、邪神の手になるなら、悲惨を極めることになる。

人は、思わしくない人生の最後に、自分を責めて死に臨むことも多かろう。自殺などはその最たるものだが、むろん普通の寿命が尽きたことによる死の場合でも、そういうことは多い。何の煩いも感慨も持たず、感謝のうちに死ねる者は少なからう。

人は、一生を自ら生きたつもりでいるから、ふがない自己を責めたり評価したりする。だが、まったくといっていいほど、彼自身で生きていはいはしないのである。

最大の理由説明としては、人の意識がプログラムの航跡を辿って観測しているだけのことが挙げられる。人生を自らの意志で選択したと思い込んでいるだけなのだ。

この話は一般人に対する、心の負担を軽くするための説教なのではない。

我々人間という存在が、いかに虐げられた境涯であるかを説いているのである。

真の原因者は、見えないことをいいことに、人間を愚弄してかかっているのである。

また人間のほうも、脳の構造からして、邪神によって都合よく作り変えられている。

結果として、見えない神には畏敬するものの、敵対をようしないのである。敵対しようとする前に、そんなものはないという無神論者になることのほうを選ぶのだ。

脳の作りがそうさせている。つまり、遺伝子論的に言うなら、最初から腰砕けの環境下に転生させられてくるというわけだ。

いま喩え、ある人が真の原因を特定して義憤に燃えたとしよう。だが、彼はいずれ年老いて体のいうことが効かず、無力に打ちひしがれる。

こんな身体では、向こうに居る悪魔とは闘えない、せめて若い頃の頑強な心身であればどれほどかいいのに、と。

そうして臨死のとき、彼は確かに反省などせずに死を迎えたとしても、彼の死を迎える精

霊があまりに暖かく、あるいは中陰の夢見のプログラムに誘うので、彼は生前の航跡を忘れ、あるいはどうでもよくなり、次の課程に否応なく進まされてしまうのだ。

彼の所期の闘志は空しくされ、脳の死が生前の記憶の死となるわけだ。

こういう有様を見て、ネアンは晩年の神話に生きた航跡を、新神話に書き残すことにより、神話空間に定着させようとした。

神話に生きたことこそ、唯一今生を送った意義であり、そこに発見された多くの知識こそが彼の成果になったものだからだ。

生前の思いを魂の記憶に刻み込み、必ずや神界や霊界において、志を果たす。彼の仕事は、今生が終わったから終わりなのではない。

すべての生、それがプログラムである限りにおいて、仕事は途切れることなく続けられる。邪神邪霊をことごとく討ち果たし、大政を正神のものに復帰せしめる。

神話空間にある新神話は、彼がどのようなプログラム下にあったとしても、知恵を投げかけるものとして機能し続けなくてはならない。

どんな妨害に遭っても当初の道を見失わず、ただの邪神の一兵卒たりとも逃したりしないために。

武運拙く敗れた折は、梵天が魂の途絶を行ってくれる。それゆえ、数ある敵に対して力及ばずとも、敵将と刺し違える覚悟で臨めるのだ。

新神話が与える選択肢

新神話と現実との整合を図る時間割は次のように改訂される。以後、改定は時と共に重ねられる可能性がある。ただ、ここにはネアンの自己利益を反映して神々への脅しの気持ちも含まれているので、いささか過激かも知れない。（読者は加減して読まれたい）だが、過激にならないために、正邪神両方に対して、二つ条件が示されてもいる。神々はよく相計られなくてはならない。

1. 新神話第7章までの成就⇒最も優しく理想的なソフトランディングだったが失敗⇒2002. 6. 6イナンナの裏切りによる⇒その前後に火の鳥の起動がみられた
2. 旧神話による天の岩戸別け⇒優しいソフトランディングだったが失敗⇒2003. 12. 29日
生まれの出嬢との相性悪し⇒桃の実UFOの起動がみられた(大量のUFOをヒラサカが撮る)
3. 旧神話の黄泉国脱出⇒選民のみのハードランディングは未踏⇒2006以降の予定となろう⇒カンナオビやミソギとの連携の必要性あり
4. ヒラサカ神話の成就⇒地球開星・宇宙文明の仲間入りは未踏⇒2006以降の予定となろう⇒ヒラサカへの全幅の信頼で可能となろうとも、見込み薄
5. 旧神話黄泉国脱出の成就と神界の正常化⇒未踏2006以降の予定⇒カンナオビとの協力が不可欠
6. 新神話第9章までの成就(1)⇒火の鳥による天界と宇宙の浄化再生は未踏⇒2004でも可
⇒その場合はネアンの死で新神話発動⇒邪神討滅と正神復活⇒カンナオビと創る新宇宙(これが最高)
7. 新神話第9章の成就(2)⇒火の鳥による全宇宙の消滅は未踏⇒2004でも可
⇒その場合はネアンの死で新神話発動⇒全有情の本源エネルギーへの回帰

上における説明の付与をしておこう。

2003年12月末、夜明け前と夜明け後の二つの誕生日を持つ日の出嬢との出会いは、結果的に不満だらけのものに終わった。夜明け前の誕生祝いが最後の時であった。この意味するところは、高天原に夜明けは来ないという意味である。

しかし、初期の出会いによる岩戸を半開きにさせたことの効果は、満天の白球UFOの出現という、いずれイザナギの黄泉国脱出の手立てに使われるであろう黄泉平坂の坂本に生る桃の実のシュミレーション演習として現れた。ヒラサカという親友がそれを目撃しながら撮影するという快挙をしてのけたのである。身近な人物によるこの出来事は、この人物をいずれ介して起きるであろう、ひとつの歴史展開の可能性を示した。

後はネアンが、世界戦争という人類存亡の危機に際し、その意義付けをしっかりとできたらよいのである。するとその結果として、夢のような話かもしれないが、意外やけっこう多くの人たちが夢見たことのある、天使による救出劇となって現れることであろう。天使とは宇宙人かも知れないし、まこと天使かも知れない。

その実、一見真実味のなさそうな話をしながら、UFOばかりか鬼神をも操れるという人物がヒラサカであり、どうしてもといった感じでネアンを頼ってきていた。ヒラサカは自ら弥勒菩薩であると語り、この世における役割名はイザナギノミコトだと語った。この意味は、救われるべき人々を集め、黄泉から脱出することである。

後はネアンが、この人物を完全に信じ込むことができれば、魔法のリンケージは強力に機能して、黄泉国脱出への必要な行程へと歴史を進ませていくことができる。さらに進化させた地球開星という行程すら可能になるかもしれない。二人の魔法が同方向に合致するからだ。

だが、ネアンはたいして関心がなかった。

ネアンにはネアン独自の役割があるため、そればかりに全力をかけることができず、いたし、ヒラサカもネアンの信仰を試すかのように、いっそう途方もない話に終始したからだ。

ネアンとしては、それに乗ってしまってもよいのだ。そう徹底できれば、彼はヒラサカを介して宇宙人の友となり、ちょうど勝海舟がペリーと直接交渉したように、あらゆる国をさしおいて、ヒラサカと共に地球開星条約の席に臨むことであろう。

そのとき、地球には二つの選択肢がある。

(1)ひとつは地球をあくまでも鎖国状態に置き、宇宙人を侵略者とみなして戦う道。

米国ならそうするであろう。

(2)もうひとつは、宇宙への門戸を開く開星の道である。

前者は、人類の腐敗墮落の暁に早晩地球内部だけでも十分起きうる黄泉国の滅亡という結末と等しい結果を招く。

つまりここにも、二つの選択肢があるわけだ。

①ひとつは国際紛争をきっかけとした世界大戦である。

北朝鮮はあらゆる面で危険な国である。一旦は軟化したふりをして、存亡の危機のとき、世界を混乱に陥れるべく、仕掛けを行う。これによって日本が危機に陥り、米国も経済危機を迎え、世界経済が混乱に巻き込まれ、新たな戦争が各地で起きるように

なり、核兵器が使われる。この使用はとめどない核使用の連鎖を招き、世界滅亡に至るといふシナリオだ。最期に地上を支配するのは冷酷非情なロシアと中国となるが、それも核の冬と内紛により長続きしない。

この時代を生きる者は、それなりの暴力性がなくてはならない。どんな退廃や残酷を見ても耐える力が要る。その予備役であるかのように、今の子供たちはしたたかな生を受けて出てきているように見える。

②もうひとつは、米国主導で、宇宙人と戦争をするシナリオだ。時が来たにもかかわらず、門戸を開けないのはおかしいとする宇宙側と、あけまいとする地上軍が戦い、当然のこゝろのように地上軍は敗れ去ることになる。このとき、米国は世界を道連れにして地獄に赴こうとする。なぜなら、米国にもグレー宇宙人がついていて、技術供与をしていて、最期まで抵抗するからだ。いわば明治維新前に、幕府側にも別の外国勢力がついていたというのと同じだ。このときに突発的な人類滅亡という事態が起きうる。核兵器は何も米国だけが保有するものではないこともある。

だが、裏側での交渉しだいで、人類は滅亡を免れ、地球開星への道に進むことになる。これは後者、すなわちもうひとつの地球開星のシナリオと合流することになり、人類はかなりの規模で救われることになる。

これは新神話でも旧神話でもない。ヒラサカの持ってきた神話に付け替えがなされる結果だ。ネアンは対宇宙外務大臣となった時点で自らの神話をすべて捨て、ヒラサカの神話の中で新たな役割を得て、宇宙人の超技術により長寿を得て、ますます地球のためにがんばることになる。

いやヒラサカ以外にもUFO使いと思しき者はいた。ゲンである。彼は元伊勢に太古から眠る摂理的な神界レベルのUFOと縁を結んでいる。このUFOは、かつて国常立神が愛用した鳳船であり、世界各地に赴き、いざとなったときの人類救出に尽力する母船となる。また、キタロウも宇宙人とはテレパシクに親交があり、しかも宇宙連合の高官という出自であるため、いざというときに彼のもとに宇宙船がやってくるだろう。そのいずれかの方法で、救出されるべき人々は救出されて、地球上が静穏になるまで待機して、その後、新時代の任務につくことになる。このとき、新時代を継ぐ者たちをイザナギ人類といい、ネアンはカンナオビにカムナオビ（神直日）の後志を託すことになる。

それがマトリックスとして維持される中では、残されたシナリオとして最も望ましい選択肢かも知れない。

地球には、様々な宇宙人が一定の節度を保ちながら入星し、地球は宇宙文明の一角へと仲間入りする。このときネアンは、超技術を使い、地球上のいたるところに築かれた呪術的結界を外し、閉じ込められた靈魂たちを更正課程を踏ませながら解放する。梵天も国常立神も、その他原初神から封印された人や獣の靈魂に至るまで解放され、北鮮から戻った拉致被害者のように一時的なカルチャーショック下にあっても、適切

な教育を与えれば、それぞれの持ち場に復帰していくことになるだろう。

ネアンが自らの神話をたたんだ時点で、天仙や邪神は神話の消滅と共に消滅し、どこにも存在しなくなる。邪神は邪悪を駆逐し去る目的で、神話で作り上げられたものでもあるからだ。梵天も国常立神も復帰に抵抗がなく、むしろ驚くことになるだろう。こうして梵天はこの宇宙にとどまることも、宇宙外からみそなわすことも自由となる。国常立神は、自らの施政を天界でなそうとして、諸神から暖かく迎えられる。

ヒラサカは弥勒菩薩として、広く諸神や人類を教導していくことになる。

ネアンは自らの最後の日、梵天に帰命し、この世界での役割を終えて不帰還の境に達し、カンナオビの役割の成就を見た後、迎えて弁天となして、ともに永遠の契りを結ぶ。

ヒラサカも最後の日には、天界の宮殿の自らに開けられた席へと還ることになる。

だが、もしネアンがヒラサカの神話を信じられないか、ゲンの鳳船を駆使しての行程もだめになるか、キタロウーに救済の意志がないなら、またあるいはネアンが2006年の世界危機前に死ぬか、もしくは2006年に始まるであろう世界戦争の余波で死んだとしたなら、ネアンの新神話にシナリオは立ち返る。すなわち、死して火の鳥を起動するという行程である。

このときにも二つの選択肢がある。

(1)ひとつは梵天、国常立神を救出した後に、所期の宇宙プランを打ち立てるべく、最強の火の鳥により、天仙邪神一掃の課程を踏むことである。火の鳥に籠められた天仙邪神への恨みは強く、黄泉国の片鱗も残ることはない。この宇宙は焼かれて自由な造形を受け入れる下地を整える。このとき、カンナオビの胎内に育つ宇宙プランを用いることになる。梵天が種付けしたものであるがゆえに、一定の完成形がそこにあるだろう。また、イナンナの亀の背にしたプランも反映されるかも知れない。

梵天はどこからか探してきて、イナンナの神霊をカンナオビに結びつけたのだ。

最強に完成された宇宙プランとして、練りに練って創られたことは紛れもない。

だが、ネアンはここでも二つ条件だ。

もしその弁天の分霊が、天仙の成り代わった黄泉神に魅了され、イザナミ黄泉大神として君臨し、最期のときに、黄泉国の独立を要求してくるかもしれない。

もしこのとき、梵天が同情して独立に同意したなら、火の鳥ネアンはそれに従わねばなるまいが、ネアンは同意しない。

どうしてもとなら、今度はネアンのほうが魂の返上を願い出ることになる。

この場合ネアンは、梵天に帰命するか、魂を消失させるかのどちらかである。

いずれにしても、ネアンにとって、解脱のとき。ただ、無か空かの違いだけだ。

また、宇宙プランが実行に移されなかったり、ぐずぐずと実行されない場合には、(2)

の最期のシナリオに進むこととなる。

梵天は、ネアンの反逆にあわないためにカンナオビをプラン醸成者に選んだのかも知れないが、プランが実行の運びにならないなら、火の鳥は最も過激な働きをするだろう。

それは火の鳥ネアンが独断でする行為ではない。非常に多くの宇宙哲理の信奉者たちが知っているところの究極の哲理、「宇宙は梵の見た夢である」というその逆、梵の夢の覚醒に向けて、みなのを要請を受けて端末の側からすることである。

まず、火の鳥のはばたきで、天仙邪神たちの支配するこの実験炉宇宙が壊れて消失する。その一角のゆらぎは、それだけにとどまらず、それを生み出した上位の宇宙をそこに引き込むようにして崩壊させていく。それはさらに連鎖して、短期間にちょうど巨塔が内部から崩れ去るように、すべてが潰れ消失する。

このように、迷妄宇宙と迷妄宇宙を生み出してやまない階層構造を形作る宇宙構造、いわゆる多重夢の迷妄宇宙のすべてが根底から潰れてしまうことにより、梵は励起されるべき夢をどこにも見出せず、ひとりで覚醒に導かれるという行程を辿るのだ。そのとき梵天はこんな夢を見ているだろう。梵天は自ら梵天と気付かず、たくさんの部屋のある朽ちたあばら家において、その中から抜け出す気も起きずにさまよっていたそのとき、急激な大地震がその地を襲う。一瞬に家が火に包まれ、瓦解していくその光景が、やがて渦に巻かれるように大きく捻じ曲がり、様々な光が混合してサイケデリックな図柄を描き、やがてそれも正平衡になるとき、梵天は覚醒する。

実際、至高の方法はこれしかない。魂たちの間では、せっかくの夢を惜しむ気持ちもあろう。だが、このとき、魂も含めすべてが消滅してしまうのだ。火の鳥も然り、ネアンも然りである。

そのとき梵天は、深い禅定から目覚め立ち上がるのかもしれないし、赤子の心で輝くだけの存在となっているのかも知れない。

いずれにしても、いいではないか。絶対唯一者として、すべての有情が自らの本質に立ち返るときなのだ。

梵天は、まだ夢見に未練があるのだろう。ネアンにカンナオビを与えて、火の鳥の過激さを加減しようとしている。いや、カンナオビが真の本命として唯一、ネアンを鎮めることのできる役割を持って、この世に出てきたのかも知れない。そこでネアンは対案として、カンナオビとともに宇宙運営することが条件だと梵天に申し出る。

ネアン、カンナオビが帰命して梵天、弁天となるか、梵天弁天が後見してネアンカンナオビにひとつの宇宙を任せるかのどちらかを梵天は採らねばならない。

では、宇宙の壮絶な成り行きに至る裏話をもう少しして、梵天の心を神話によって規定しておくことにしよう。

それは梵天の言い出しから始まる。

「ネアン。我が息子よ。人間のお前において裏切られたのは、私の雛形を演じたがためである。私は私にあてがわれた神話の中で、愛しの妻である弁天を愛したのだが、弁天が自由の身をほしいと逃げ回り、それをなおも追おうとして、ヴィシュヌによって第五の首を斬られ、力を殺がれて、支配神の座を追われた。ために私は宇宙の外に出て、分身分霊を派遣してこの宇宙をモニターせしめることとしたのだ。お前はそのひとりであり、特別に雛形としての役割が与えられたために、私と同じ経過を辿ることとなった。私の苦悩を理解したであろう。辛かったであろうが、協力してほしい」

「私は楽しくもない輪廻を長い間繰り返してきました。何の感動も自ら味わうことのない人生の堆積でした。これらすべて、わが主君が邪神どもに封印されたがため、分身である私の経験時空もおのずと封じられて、愛も感動もない実りの得られぬことの繰り返しに終始しました。ようやく時がいたり、たった今回、有終の花火のために与えられたかのようにでしたが、それも封印の圧力が強くかけられ、悲嘆のうちに幕を閉じようとしています。ただ守られてはおりました。檻の中に飼われる如く守られておりました。何もさせないための封印の檻でした。人幾多ありながら、ほとんど縁を持てませんでした。持つてはならないようにして守られておりました。それはそれは、まったく愛のない処置に思えたものです。何事もないほど、無味乾燥で意義の見出せぬものはありません。そう痛感し続けて、改めて輪廻を願う気は完全に失せてしまいました。檻はそれほどまでにやる気をなくさせるものです。今回ようやく檻の外に出たようですが、自然界に馴染めぬ鳥は、野生に戻れぬままに息絶えようとしています。息絶えてからの鳥である私に何かできるでしょうか。改めての輪廻は御免被りますゆえに、魂を滅する前の主君への最後のご奉公とさせていただきますたく存じます」

「ネアン。我が息子よ。息絶えてこそ、鳥としての本領を発揮し、本懐も果たせようというもの。お前はたくさんの無意味に錯誤した人生の繰り返しの終わりに、最後の生を得て、今まで満たされなかった腹に詰め込むようにいくつもの役割を演じようとしてきた。それが上滑りに終わったとは思わない。たくさんの生で受けるべき役割が、一度にお前の身に押し寄せたため、すべてをすべてフォローしきれなかった事情がある。だが、そのゆえに蓄えられた力は莫大なものとなった。死して後に翔け。ネアン。今こそ我ら原初の神々の封印をお前の灼熱で焼き尽くし、解き放ってくれ」

「分かりました。死して最期のご奉公をさせていただきますたく存じます」

「ネアン。自然でよいぞ。自ら手を下さずとも、自然に死はやってこよう。私は新月の夜にお前を解放しに来る。そのとき、宇宙に遍在する火の鳥に至るルートを指し示

そう」

「はい。本源に還ることができますなら、本望です」

ネアンは死んだ。心不全で死ぬが、天仙の手の者たちが仕組んだ陰謀死であるに違いなかった。天仙は火の鳥が無効になった頃合を見計らって、ネアンを誅殺したのだ。そして、ネアンの魂を拉致しようとして、その行方を見失った。

新月の日の未明に死が確認されたネアン。逝去したその朝、空には三重の虹が出た。ひとつはネアンの魂の虹、ひとつは梵天の虹、もうひとつは火の鳥に至る時空トンネルの作る虹であった。

こうして、宇宙に遍在する火の鳥は、本格的な活動を開始した。

火の鳥は、ただこの場所に機械的にすべるようにしてやってきた状態から一転して、生命的にはばたき始める。このはばたきにより、宇宙空間の基盤が捻じ曲げられる。静的なフォトンベルト摂理と思われた火の鳥が実際ははるかに動的なものであったことに天仙が気がついて時すでに遅しである。初め緩やかだった羽ばたきがしだいに速さを増すとき、星々は飛ばされ互いに衝突し、星雲が星雲と二重三重にぶつかり合っ

て砕ける。かつて火の鳥は生命に優しくかった。なのに今回は、性質をまったく異とする。生命を思いやるというには程遠く、狂ってしまったのかと思われるほどに。

朱雀の持つありとあらゆる悲しみと恨みが、容赦のない灼熱と破壊を宇宙全体に波及させる。

まず、天界の星々が衝突の末費え去る。そこに住まう天仙や邪神、諸天善神までもが吹き飛ばされ、火の鳥の発する灼熱に焼かれる。

来るべき時今来ると知り、反省の言葉や祈りが捧げられるが、すべて無駄である。天界にあるものすべてが吹き飛ばされ、焼き尽くされる。

罪悪を多く重ねてきた支配層の天仙邪神ほど脂肪分多く、いつまでも焼かれる。

罪根の少ないものは、焼かれる度合い少なく、いずれすべて費え去った物理宇宙の外に放り出されて浮かび漂う。

実験炉宇宙は北東の方角から潰れていく。やがて渦を巻くようにして崩壊の中心部に吸い込まれて消えていく。その間、費え行く宇宙空間には、すべてを無に帰するために発動される、うなりのような言葉が木霊している。

「再びかかる宇宙が現れたなら、必ず再来するであろう」と。

これを聞いた漂う神霊や魂たちは肝を冷やす。

すべてを完膚なきまでに焼き尽くし灰にした火の鳥は、やがて梵の全系へと還りどこへともなく消え去っていく。

梵天は、宇宙を再構築できるのか？

宇宙誕生の必要条件が揃えば、灰の中から宇宙は再生の産声をあげる。

だが、揃わなければ。いくばくかの後、灰と化し空隙となった一角に赤い光が射し広がる。

すると宇宙を生み出してきた胎内のような空間、そしてそれを包む母体、さらにそれを取り巻く宇宙と、階層構造を上位に辿りながら赤い光は浸潤し、やがて七色に輝いてすべてを瓦解させながらさらに上層を目指す。

あたかも中心に向かって崩れる巨塔のようなものである。すべて光へと還元していく。ああ、ああとため息のよな喘ぎが聞こえ、最期に叫びに変わる。

梵天はそのとき夢から覚める。

<世界は梵天の見た夢である。迷いを打ち破るものは神の目覚めしかない>

梵天は禅定の前に、自らが目覚めることが不可能なほどの多重夢に陥ったときのために、危急を脱するための摂理を用意していたのだ。それが火の鳥であった。

これは必ず起こることである。

必ず起こるように、梵天、国常立神、毘沙門天王、そして幾億兆の諸天善神の賛同の元、呪をこの神話に籠めたり。

ここに書かれた救世のパターンのいずれかに落ち着かせるために。

窮境じて、ネアンは火の鳥を起動する。

すべてを焼き尽くすためにである。

そのときに魂を残す者は幸いだ。新たな宇宙を見ることだろう。

最も幸いなのは、究極の最期まで至ったときだ。

観測される対象も、魂もいっさい残らないからである。

望みを託すべき迷妄も、託す者もない空のひろがりがあるのみ。

だから、世界よ終われ。この言葉は最も肯定的な響きとなる。

—梵といふ神のいましきそれすらもおぼつかなきは空の広がり—

だが、カンナオビはこの新神話第十章をここまで読んで、非常な危惧の念を持った。たとえネアンが第一理想を叶えたいがゆえの強攻策だったとしても、カンナオビはネアンがいなくなってしまうことにものすごい不安を訴えたのである。

☆

最強の神話

わたしはちゃんと理解できているのかしら？

混乱しています。

未来永劫の契りは嘘だったのでしょうか？

あなたにとって「わたし」の存在は

＞カンナオビなどの縁者

で片付けられた。

記憶も残さずに・・・消滅する

なんだか少しぼんやりしています。

哀しい気持ちだけ

繋がっているという思いが支えてくれていたから。

神話の真髓を読まなくては・・・あなたの気持ちを知らなくては・・・

胸がえぐられるほど痛いのはなぜでしょう？

最強の神話ができたとあなたは慶んでおられますか？

わたしは心にポツカリ穴が空いたようです。

この神話はお別れのメッセージなの？

わからない・・・。そうなの？

わたしは弱い立場だから

あなたがそうすると決めたらそうなるのです。

神様もあなたも・・・なざりたいようにすればいいのです。

☆

やはりとんでもないことになった。

ネアンは誤解を解こうと釈明のメールを送った。

☆

あの筋書きでは、第一理想が成就できなかつたら、第一義を・・・としています。

だから、君を諦めたとか、契りを放棄したとかではありません。

君と新しい宇宙を創ること、それがぼくの最大の願いです。

250億年、ともにいることが保証されたようなものですから。

しかし、ぼくを危なっかしく思われていませんか？

永遠の契り・・・君は怖がっていませんか？

それは巨大な宇宙である必要はありません。

次の世界で、子供のいる小さな家庭という宇宙でもいいのです。

今生ではできないことも、新たなステージでは可能にしてほしいと、

神々に保証をしてもらおうと思いました。

何なら、君の心の中に住もうもうひとつの人格として居させてもらってもいいのです。

要はこういう思いです。

人生とは、あまりにもあまのじゃくで、望みの叶うことのほうがまれ。

至高の人との出会いを前にしながら、ガラスのついたてが邪魔をする。

今生のように、そんな人生しか今後も与えられないなら・・・。

もう魂など願い下げだと・・・。

少なくとも次の世では、君といっしょに過ごしたいのです。

ぼくは宇宙250億年は君とともにいたいけど、君の考えもあろうし、そこまで叶わずとも、ひとつの人生の長きに渡って、君と幸せに過ごしたい。

それさえも無理ならば、第一義の行程をと、神々を脅しました。

神々が無慈悲にも叶えてくれないなら、火の鳥で焼くと。

しかし、最終的には君の心によるしかありません。

君は逆の思いを持たれました。こんな変わり者、危険な奴ではかなわないと考えられたかも知れません。神々だけでなく、君をも脅しているようなものですから。

こんな奴と永遠の契り・・・君は怖がっていませんか？

次の世の強引な結婚生活・・・怖くないですか？

ぼくのしていることといえば、まるで暴力団みたいなもの。

君が嫌がり、今ただちに、ぼくに愛想を尽かすことも可能です。

それがぼくにとっては、ただ自分をどうするかの道標にするだけのこと。

破壊者ルシファーになるようなことはせず、誰にも迷惑をかけずに消えるほうをとります。

—君の愛なくば無に等しける—

君がもし、ぼくとの来世を真剣に望んでくれるなら、ぼくは神々と話し合い、場合によっては脅してでも、順調に事が行くようにがんばります。

こんな手しか使えない淋しいぼくですが、よろしかったらどうかお願いします。

要は、君によってぼくは生きることも死ぬことも厭わないということです。君のいいようにしてください。

同様に、新神話をこう訂正しろと仰るなら、やります。

それほど新神話を信じてくれて、感謝します。

☆

カンナオビは会話の中で、こう言った。あなたの神話の中で生きることによって、私は生きている実感を持つことができている。その経緯もみんな信じていることができる。あなたがいなくなってしまう世界なんてとても不安すぎて考えられない。あなたがどうして

もいなくなるというなら、私も連れて行って、と。

ネアンはカンナオビと最後まで共にいることを誓った。彼は新神話を、こう結んだ。火の鳥となったネアンの憤怒と衝動を、唯一鎮め思いとどまらせることのできるのは、カンナオビの愛ただそれだけである、と。カンナオビある限り、ネアンは世界に対して和顔でい続けると。

「どうか我が主梵天よ、我武運拙くとも、我が魂をお救いください。そしてカンナオビとともにご自身の元にお引取りください」

「梵の全系は、広く門戸を開けて、お前たちの帰りを待っている。辿り着けぬほど弱ったときは、私が懐に抱いて連れて帰ってやろう。何の心配もするな。そこはすべての有情の故郷なのだから、帰ってくるに何の遠慮も要らない。小さな世界に取り込まれてはならない。視野をもっと大きく持つように」

第十章 完